

地 域 の 物 語

アーカイブプロジェクト

2014-2015

---

あっちはこっち  
こっちはあっち

---

介助・介護をめぐる聞き書き集

---

世田谷パブリックシアター

---

地 域 の 物 語  
アーカイブプロジェクト  
2014-2015

---

あっちはこっち  
こっちはあっち

---

介助・介護をめぐる聞き書き集

---

世田谷パブリックシアター

---

## はじめに

本書は、世田谷パブリックシアターで二〇一四年、二〇一五年に実施した演劇ワークショップ『地域の物語』から展開した、「地域の物語 アーカイブプロジェクト2014-2015」の記録として、プロジェクトに参加した二十代〜七十代の男女の、介助や介護にまつわる体験、記憶、思いを語ったこえを集めたものである。「聞き書き」の手法で集められたこれらのこえは、一人の語り手の話が、聞き手／書き手によって、かたちを変えて複数回、掲載されている。

冊子化にあたり、各聞き書きにおける表記は基本的に統一し、部分的に語り手、聞き手／書き手双方の了解を得て修正した。

注釈は、二〇一六年現在の医療・介護制度に関わる言葉を中心に付けたほか、本冊子がアーカイブプロジェクトである趣旨に基づき、現在の社会において共有される文化・社会的事象に付けた。

世田谷パブリックシアター

はじめに 世田谷パブリックシアター

9 チャコ

先生と楽しく 書き手||いまむー

大好きな先生のこと 書き手||あきこ

寝たきりの人が一生守るから、って 書き手||ふくちゃん

お・も・て・な・し 書き手||ポラン

23 あきこ 一

ガイドヘルパーの思い出 書き手||いまむー

もし、あきこさんがいなくなったら、君たちは生まれていなかったかもしれないだよ 書き手||ポラン

十年にわたるガイドヘルパーの中で 書き手||チャコ

30 よしだ

何もないところで、自分ってどうなのかな? って 書き手||たまちゃん

35 ポラン

全盲小学生のまあ君の先生になったポラン 書き手||チャコ

絶対、うまくいくな 書き手||いまむー

40 うっちー

ひとりで ふたりで 書き手||いまむー

困ってるどころじゃない 書き手||やまも

うろたえない主人 書き手||よしだ

57 やまも

痛風にふかれて 書き手||よしだ

59 ようこ

抱え込んだじやう愚かさに 書き手||よしだ

怒りって、溜めていけるんだよね 書き手||たまちゃん

母の不在 書き手||ふくちゃん

71 しら

年のせいかな？ ケガのせいかな？ 書き手||あきこ

老いについて 書き手||さいとー

ボクの老いはまだまだ 書き手||にけ

83 にけ

老いについて 書き手||さいとー

鳥取のにけ 書き手||しら

自分の行き先 書き手||ふくちゃん

92 さいとー

妹に似てるさいとーさん 書き手||しら

私の生きがたさ 書き手||たまちゃん

他人とつながりたい！ 書き手||にけ

99 あきこ||一一

enjoy シニアライフ 書き手||にけ

あきこさんごめん、無呼吸で寝た 書き手||しら

いまを元気に生きていく 書き手||さいとー

戒名もいらぬ 書き手||たまちゃん

113 かつやまちゃん

彼女がやりたいことは何でも 書き手||あきこ

家族 書き手||ポラン

彼女があつて、僕があるのかなと思う 書き手||ふくちゃん

123 ふくちゃん

おじーちゃんのこと 書き手||さいとー

おわりに 恵志美奈子（世田谷パブリックシアター劇場部学芸）

# チ ヤ コ

自称アラカンだが、アラフォーにも見える女性。  
スリムで長身。銀髪には張りがあり、いつもセンスの良い服を着こなしている。  
30代イケメン俳優に夢中で、ツアーがあると、全国どこまでも追っかけていく。

## 先生と楽しく

書き手 〓 いまむー

すごくきれいな人なんですけど。この人が早稲田大学の大学院生の時に、私が高校生で、家庭教師をしてくれた人です。私、小学校は今でいう不登校で、メンタル弱い系で、中学はなんとか。高校ではハゲちゃったり、顔面が半分麻痺になったり、学校に行けてなくて。この人は国文科で、私が学校のペースをつかめるように、学校の勉強と一緒にやってくれました。高校に戻って大学に受かったあとともなんとなく気が合って、会ったりとかして、それから四十年間仲良くしています。

そんな大事な先生なんですけど、三年ほど前、三月の半ばに、首が痛い肩が痛いって救急車騒ぎになって、病院に運び込まれて、「すぐ手術しないと死にます」って言われて。鎖骨のところを切って膿を出したんだけど、看護師さんがドクターに「先生、自発呼吸をしていません」って言う声が聞こえたって。先生の妹さんから知らせを受けたとき、私、泣いちゃって記憶がなくて。顔も腫れちゃって、人に会いたくないってなっていたから、もう一生会えないんだなって。「悲しい」とか「絶望」って気持ちを表す言葉じゃないんだなって思いました。気持ちを表す言葉が何もない。ただ気持ちがバァーって。大変だったんだけど。

二年くらい経ったら呼吸器が外せて。何月何日何時に電話くださいってメールが来たから、仕事中心で電話してみたら、小さい声で「チャコー、チャコー」って。呼吸器が外せて、しゃべる練習したんだって。

首から下は全く動かないのに、そのくせ顔から下はずっと痛いんだって。ベッドに椅子が当たった振動とかがすごく痛くて、それがいやだって。

彼女は教師でもあるんだけど、歌人もやって、そのパートナーの絵描きさんがずっと世話してて。その人が仕事で行けない時は、私が行ってるんです。今年の五月二十八日に、病院を出ることになって、その人のワンルームのマンションに住んでいます。二四時間たくさんのヘルパーさんに見てもらってるんですけど、出入りが多すぎて信頼できる関係性ができないんですね。

この「地域の物語」が始まった時は、私、もうほんとに焦っちゃって、先生がベッドで管につながれてたから、「おむつ替えられるようにならなきゃ」とか、前のめりになって不安になっちゃって。でも、先生が私に求めることは、身体的な世話じゃないんだって気づいた。ようは「一緒にいて、楽しいことだけやって」って。そう言われたわけじゃないんだけど。

言葉はしゃべれるようになったの。長くしゃべると疲れちゃうんだけど。コミュニケーションができるようになったのね。でもやっぱり体中すごく痛くて、足が六本あるんじゃないかって気持ちになるって。

どちらかっていうと、相変わらずおしゃれで、きれいで、おいしいものを食べてって先生が。

私がお飯を食べさせるんじゃないやなくて、私も一緒に食べる。だからメールも、「遊びに来ない？」って。一つのを半分残して一緒に食べたり。先生は「ベッド上げるの覚えてほしい」って言ったりかはするんだけど、お腹の胃瘻いろうのところから薬入れる時とかは、「恥ずかしいからあっち向いてて」って。私は世話するより、ずっとしゃべり続けたりね。先生の娯楽担当重役って。だから今は落ち着いてます。あと二十年、三十年くらいありそうじゃない？ それなら楽しく過ごせるようにしようって。だから「遊びに来て」って。「世話してくれてありがとう」じゃなくて、「チャコも楽しかったでしょ？」って、もてなしてあげたくらいの顔して。だから距離は、先輩、後輩くらいの感じで、一緒に楽しいことしましょうって。

いてほしいのかな。いつもきれいにして、お花に囲まれて、セレブに暮らしてるぜって。先生が楽しく、人間らしく過ごせるようにしてって。

先生は私と会うまで二年、考え抜いてて、私はその時が初めてで、感情が遅れをとって、前のめりになっちゃって、私のほうが泣いちゃって。そしたらその時、先生が「あなたのことを一生守るからって言ったじゃない」って言ったのね。

## 大好きな先生のこと

書き手||あきこ

高校の頃（不登校だった）私のところに、早稲田の大学院生だった先生が、家庭教師として来て下さるようになり、私が高校、大学に進んでも、社会人になっても、今でもずっとお付き合いしています。約四十年間……

その先生が三年程前に突然、首の激痛に見舞われ、脊椎炎に。身体も動かせず、自発呼吸もできず、話すことも食べることも、何もできなくなっていました。

どうして良いかわからず、ひとりで電車に乗っていた時に、突然涙があふれ止まらなくなったことも。もう二度と会えないのではないかと思ったりしました。

でも少し前から、体は動かさないけど、食べることを話すことができるようになり退院。

パートナーが用意して下さった素敵なマンションへ。

ヘルパーさん達が交替でお世話をしてくれるので、私はパートナーの方が仕事などでお留守の時に帰ってお話したり、美味しいものをふたりで分け合って食べたりと、ヘルパーさんとは別のお付き合いをしています。「あなたのために買ったのよ」というカッシーナの椅子にかけて一緒にテレビをみたり、夕景をみたり。



私は、母親とは昔から確執があり、辛い思い出ばかり。高校生の頃からそんな親子関係をご存じでかばって下さった先生。

そんな先生を、これからも見守っていききたいと思います。

## 寝たきりの人が一生守るから、って

書き手 || ふくちゃん

先生が早稲田の大学院のときに、私の家庭教師で家に来てたんです。二年半くらい。家庭教師は高一からだったから。

私は小学校のとき、当時そういう言葉はなかったけど不登校だったのね。中学はギリギリ行けてたけど、高校ではハゲちゃったりとか、顔面麻痺とかで、また行かなくなりました。先生は早稲田の国文の人だったから、教えてもらったのは国語だけど、学校行ってなかったから、授業のペースをつかむために、世界史とか他の教科も一緒に教科書をみてくれたりしてた。大学に受かったあとは、もう関係ないんだけど、なんか気が合って四十年くらい、友だち。

家庭教師として来るのは週一なんだけど、でも週末とか遊びに行ったり。高校生なのに一緒にお酒飲んだりしてね。高校生っていても、中学の頃から「四十の出戻り」とか言われてたし、見た目はずつとこんな感じ。こないだ、遠くからチョコちゃんって言われて、えっ？ って思ったら、幼稚園の園長先生だったの。私、こんな近くに来ないと分からなかったんだけど。

そんな感じで四十年仲良くしていた大事な先生なんですけど、三年前、三月末に、首が痛い、肩が痛い

ってお医者に通ってただけど、ある晩、痛い、痛いって救急車を呼んで。それまで病院では様子を見ましようという感じだったのが、救急車で運ばれたら、その場で手術しないと死にますよってなった。

病院に運ばれたとき、看護師さんの、「先生、自発呼吸していません」って声が聞こえたって、あとで本人が言ってた。

今も、何の病気って、説明できないですね。その、突然運ばれたって知らせがあつたときに、妹さんから色々聞いたんだけど、泣いちゃって覚えてない。セキツイエンだかセキズイエンだか、よく分からなけれど、分かったところでなんなんだって。もう二度と会えないんだなって。

やっぱり、どうだこうだ言って、生徒と先生というスタンスは、やっぱりあるんだよね。嫌がられるからお見舞いも行けなかったし、声楽もやって綺麗な声なのに、もう声も聴けないんだなって。

悲しいとか絶望は、気持ちを表す言葉じゃないんだなって思いました。気持ちを表す言葉がなかった。わーってなるだけで。新玉繻＊の中で、急に、どばーって涙が出たこともあつた。

ある日、先生から、「何月何日何時何分に電話下さい」ってメールが届いて、仕事でただただ電話をかけたのね。でも、電話っていつても喋れないわけじゃない。どうするのかと思つたら、「チャコー…、チャコー…」ってちいーさな声が聞こえるの。自発呼吸ができるようになって。お祭りで、ピュー、ピューって吹くやつあるじゃない。それで呼吸の練習したんだって。

喋ることにしても、まばただけじゃなくて、五十音表で意思疎通できるようになったのは大きいみたい。胃腸いりゅうで何も食べられなかったのも、今はかなり食べられるし、味もわかる。

ほんとに、二度と会えないってずっと思つてたけど、会えるようになって、毎週のように遊びに行つたのね。

彼女、国語の先生なんだけど、歌人でもあつて。そのビジネスパートナーで絵を描く女性がいて、ふたりにて歌と絵の展示をしたりしてた。ふたりとも独身だから、ほとんどの付き添いを彼女がやってたんだけど、彼女も絵を描くから、ときどき私が代わって髪をとかしてあげたり、手はなんであいう手羽先みたいになっちゃうのかな、手をまっすぐにしたり、足を伸ばしたり、身体の向きを変えたり、痰を取ったりしてたのね。

今までずっと病院にいたんだけど、五月二八日に病院を出ることにして、皆で相談して、ビジネスパートナーの方がマンションを持って、そこに移ったの。

引越す前には、痰の吸引とか色んなことを皆で習つて。二四時間、すごい人数のヘルパーさんで面倒をみてるの。寝てる間もいつ呼吸が止まるか分からないから。総勢何人なんですかって聞いて、五人、十人って言われてもわかんないから。いちいちつまないことは聞かないことにしてるの。

最初、「地域の物語」に参加したときは混乱していて。オムツして、ベッドのわきにはおしっここの袋がぶら下がっているから。涙ぐんでも、先生は涙ぐむことで呼吸が止まる危険がある。

先生自身は、たぶんね、私がお会いできなかった重症だったときに、頭の整理はつけてるんだと思う。どっちかっていうと、私のほうが後追いだったわけ。距離感が、最初はつかめなかったのね。オムツも替えてあげたいとか。ただ、今は、先生が私に求めていることが、身体的な世話じゃないということがすぐく分かって。

カッシーナって白い椅子があつて、イタリアの家具らしいんだけど、買ったんだって。それで、あなたはその座ってて座ってないときに、「やだ、あなたのためにカッシーナの椅子買ったのに」って言われて。

カッシーナの椅子が置いてあるのと反対のベッドの側面には、おしっこがぶら下がってたり、消毒液が並んでたりするのよ。でも、私はそれとは反対の面にいる。

私は、一緒にいて楽しいことだけやって。そうはつきり言われたわけじゃないんだけど、慣れないヘルパーさんとふたりきりになるんじゃないかと、一緒にテレビ見たり、DVD見たり、少しは食べられるから美味しいものを食べたり、写真を見たり。彼女は堂珍君<sup>\*2</sup>のファンだから、ヘルパーさんのいなきに録画したMステ<sup>\*3</sup>をこっそり一緒に見てきゃーって言ったり、巻き戻して「もっかい見たい」とか言ったりしてるの。いっぱい喋ると疲れるから、チョコチョコではあるんだけど喋れるし、相変わらずおしゃれで、おいしいもの、贅沢なものが好きで。

会社の帰りに、私も晩ごはんを持って行って、一緒に食べるの。私もひと口食べて、彼女もひと口食べて。て。「遊びに来ない？」ってメールが来る。彼女も、私を介護当番って捉えてるんじゃないかと。「今度の火曜日、仕事の帰りに遊びに来ない？」って。

彼女の「娯楽担当重役」なの。行くのは不定期。二日連続で行くこともあるし、二週間くらい行かないこともある。

とにかく気がまぎれるように喋り続けてたり、うちの子のことも生まれたときからかわいがってくれたから、その娘、こないだ結婚したんだけど、結婚式がどうだったとか、娘はバレエやってるんだけど、その舞台はどうだったとか。私の好きな役者で歌手のT君の舞台がどうだったとか。

病院にいたときは今ほど喋れなかったから、寝ちゃったかなって思ったら、目をつむって声を聞いてるんだって。目を開けてるだけで疲れるから。でも私の声を聞いてたいって言うんで、五時間とか喋り続けたりした。

これからお互い、二十年やそこらは軽くありそうじゃない。だから、介護施設にいるんじゃないかと、楽しく過ごしていきたい。ヘルパーさんなんか絶対いなきにね、ふたりでボーイズラブをこっそり見たりね。やっぱり六十過ぎて、たまに見たくなったりするのよ。

今はベッドが身体の向きを変えてくれるんだけど、ご飯のときとか、首の下のタオルの厚みを変えたりとか、そういうちょっとしたことはやる。指の間も、放っておくと茶色くなってきちゃうのね。だか

らお風呂あがりとか、海外のどっから買ってきてるクリームでマッサージする。でも、一番良い匂いになってるのはチャコよって言われる。

ヘルパーさんは、おしつこの袋をジャバジャバ捨てるんだけど、私は、そういう時間には遭遇しないようにできてるんだと思うのね。一度も見たことないもの。

相変わらずお花に囲まれて、セレブに暮らしてるわよって、先生が楽しく、できるだけ人間らしく暮らしていることが大事。先生の昔のボーイフレンドがお花を贈ってくれるから、ホストクラブのナンバー1が入院したみたいになってんの。

先生が初めて喋れたとき、号泣しちゃって、私が何も喋れなかったの。それで、先生が言ったのは「あなたのことは一生守るからって言ったじゃない」って。

ヘンでしょ。寝たきりの人が一生守るから、って。うちの母、愛想はいいけどちょっと変わってるの。そういうこと、家庭教師に三年も来てたら、わかるじゃない。外で私のこと誹謗中傷して、そのくせ相手に「そんな娘なんだけど、私が産んだ娘だから世間の誰が敵にまわっても、私は守らなきゃ」って言うんだって。「そう言ってお母さま、泣いていらっしやるわ」ってみんな言うのね。そういうの、色々わかってたから。

私がぐれもせず、私、けっこうちゃんとした大人だと思うんだけど、そうなれたのは、先生のおかげだと思うの。私のことずっと守ってくれていた。

何を守るのでもないけど、あのママの言ってること違うよって、わかってくれたのは彼女くらいだったの。

T君のバレンタインイベントで当たったサイン入りTシャツがあるんだけど、それをずっと先生に自慢していたら、「しょうがないわね、あなたが死んだらね、あなたのお棺にそれ入れてあげるわよ」って言ったのね。「あなたの娘さんは、なにこれ？」って、捨てちゃうからって。

どっちかっていうと逆でしょ、死に近いのは。

「なんでそこまで私のこと守ってくれたの」って、聞いたことはあるの、何かテキストなこと言ってみしたね。

\*1 新玉線・東急田園都市線の渋谷〜二子玉川間のかつての路線名。二〇〇〇年に田園都市線に統合された。

\*2 堂珍嘉邦（どうちんよしくに）：一九七八年一月一七日生まれ。ミュージシャン、俳優で男性ファッションボーカルユニット「ケミストリー」のメンバー。

\*3 Mステーション…テレビ朝日（ANN系列）で一九八六年一〇月二四日から毎週金曜日夜に生放送されている音楽番組。

# お・も・て・な・し<sup>\*1</sup>

書き手 || ポラン

高輪の高級マンションでカッシーナの椅子に腰かけながら夜景を眺めている。部屋じゅうに、飾られた花の香が漂っている。

私が高校生の時、家庭教師をしてくれた時から、長いつきあいの先生とふたりきりの大切な時間。おいしいものをふたりで分け合いながらの時間がはずむ。

先生が自発呼吸ができなくなったと聞いた時は絶望の淵につき落とされたが、首から上が動かせるようになってからは、こうして私をもてなしてくれる。

今は、

「チャコ、遊びにきてね」

の電話をととても楽しみにしている。

\*1 おもてなし…二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックを東京へ招致するために、タレントでフリーアナウンサーの滝川クリステルがIOC総会でのプレゼンテーションで使ったフレーズ。  
二〇一三年の流行語大賞に選ばれた。

# あきいし<sup>1</sup>

小柄で優しい声でゆっくり話し、小唄・三味線の出稽古に赴く。  
最近、タップダンスを始めたせいか、冷え性が治った。  
すっごく控えめだが(つつけばもっと)引き出しがありそうな70代！

## ガイドヘルパーの思い出

書き手 〓 いまむー

私がガイドヘルパーをしていた時のお話です。以前住んでいたところで、視覚障害者の方のガイドヘルパーを十年あまりしてりました。

家の中のことはヘルパーの方が、私たちはドアからドアというか、病院やら編み物教室やらへご一緒に習いに行く時に、私たちがお供してました。以前はボランティアだったんですけど、途中で東京は有償ボランティアになって。やっぱり資格があった方がいいねって、講習を受けたりして、みんなで資格を取りましようって、青島さん\*の名前で免状をもらって。

男性も女性もいろいろな方とご一緒にしましたけど、みなさん明るくてお話好きで、外に一歩出たらすぐ話し始めて、私は「はい、はい」と返事をしながら、周りを確認しながら歩きました。

その中で一番若かったのは、盲導犬を連れた当時、大学院生だった女性でした。本当は盲導犬を使っている人はガイドヘルパーをつかわないんですが、初めて行くところはワンちゃんもわからないのでね。何かでご一緒にしている話をして、私が小唄をやっている話をしたら、「聞きたいに行きたい」と言って、聞きに来たら「やりたい」ということになって、うちに習いに来るようになりました。最初は

唄だけの予定だったんですけど、唄がうまくて、お三味線もやりました。私たちがみたいに譜面が読めないで、全部暗譜で覚えて。上手に弾きました。

そんな彼女にある時ボーイフレンドができて、その方は三歳くらい年下の他の大学の大学生でした。生まれつきの脳性麻痺で、産まれるときの事故で酸素がいかなくなつて。書いたりできないけれど、頭のいい男性でした。恋仲になって、結婚したいと思うようになったんですけど、周りから反対されて、まあ、私は反対しませんけども。でも反対されるほどね、思いは。そしたら都営住宅の募集があったので、申し込んでみたらと言いました。障害者向けのところもあつて、それがうまいことに当選したんです。

新築で、婚約者がある方の家族向けの2DKに。それで、周りを説得して、いよいよ結婚ということになりました。おうちの方が遠かったのか、あまり一生懸命じゃなかったのかもかもしれませんけど、私が役所でふたりの名前を代筆しました。彼女は目が不自由で書けませんし、彼は手が不自由で書けませんし、それで結婚しました。それで子どもができたんですよ。子どもができる前に、何度か盲導犬を連れて田舎のうちまで稽古に来たりもして、どこまででも行くんですよ。

その頃は福島に住んでいたんです。六十歳でリタイアしたんですね、うちの夫がね。それで年金を調べて、「これで暮らしていけるの？」ヤッパリ田舎に行かなきゃ」って。月に一回東京にお稽古に出してもらうって条件で、引越しました。彼女も福島まで稽古に来たりしました。子どもができてからは私が稽古に行ったりしたんですけど、でも子どもがハイハイしはじめてからは、しばらく稽古は休みになりました。ある時、旦那さんも連れて遊びに来たいということになったんですけど、「ボランティア

を頼まなくちゃだめよ」って、人を頼んで、二三日遊びに来ました。

旦那さんは、全国の大学のバリアフリー状態を調べて本を出す仕事をしているんですね。下の子が産まれて、一年生になったんだけど、上の子は中学生になりました。都営住宅に今も住んでいます。

こちらに来てから、二度目に遊びに行った時に男の子がふたり家において、「あきこさんがいなかったら、君たちは産まれてなかったのかもしれないのよ」って。「え〜」って思いました。

これが私のガイドヘルパー時代のひとつのエピソードでしょうかね。他にも何十人もいらっしやるんですけど、何人かの方から電話を頂きお食事をしたりしてます。

よく考えてみますと、父の姉が中途失明で目が見えない方ですが、元気な方で、結婚してまして。その息子が福祉事務所で働いていて、訪れた時に「子どもが手を離れたら、ぜひボランティアしてください」って言われて、「しなきゃ」ってずっと思っていました。自分が子宮の病気をして、輸血するかもしれないといわれたのでその後、献血せずにはいられなくなりました。

ガイドヘルパーがボランティアの時は、視覚障害者のみなさん遠慮しいいので「無償なのに頼んじやあっていいのかしら」ってなっていたんですけど、有償になったらみんな元気に楽しく出かけるようになりましたね。積極的に出かけるようになって。こうやってお互い成長していく感じでしたね。

\*1 青島幸男…日本の作家、作詞家、タレント、俳優、放送作家、映画監督などマルチな才能で、第一三代の東京都知事を務めた。一九三二〜二〇〇六年。

もし、あきこさんがいなかったら、  
君たちは生まれていなかったかもしれないだよ

書き手 || ボラン

昔、視覚障害者のガイドヘルパーをしていました。

そのときお世話をしたその方にボーイフレンドができて、「結婚したい」っていうんですね。

お相手の方は脳性麻痺で字が書けなかったので、私が結婚届けにふたり分のサインをしたんですね。今ではその方はふたりの親になりまして、お家に遊びに行ったりときに、

「もしあきこさんがいなかったら、君たちは生まれていなかったかもしれないだよ」って、話しているのを見て、その時はうれしかったですねえ。

## 十年にわたるガイドヘルパーの中で

書き手 || チャコ

私はね視覚障害の人のガイドヘルパーをやったの。有償のボランティア。有償のほうがね、障害のある人も遠慮なく「あそこへいきたい」とか「これをやりたい」とか希望を言いやすいのよ。盲導犬使ってる人はガイドヘルパー使わないのよ。だって盲導犬いればガイドヘルパー要らないけど、初めての所へはご一緒することあります。

十年、外出介助やって、一番若かったのは大学院に通ってた女子大生。彼女に三歳年下のボーイフレンドができて、結婚も考えるようになったのよ。でも彼は脳性麻痺でね、彼女は目が見えないでしょ、話がスムーズにいくわけじゃない。で、私は都営住宅のこと、教えてあげて、そしたら新築2DKファミリータイプに当選したの。それでご家族を説得して無事結婚にこぎつけたの。婚姻届はね、手の不自由な彼と目の見えない彼女の代わりに私が書いたの。ドラマみたいでしょ。子供が生まれたときも（男の子ね）、もうねえ、すぐに病院に会いに行きましたよ。そのあと男の子。その子たちが大きくなった時、彼女が子供たちに「もし、佐藤さん（私のことね）、佐藤さんと出会ってなければ、君たちは生まれてこなかったかもしれないんだよ」って言ってね。うれしかったわあ。ちよっと自慢。

何人も担当したけれど、今もその人たちと食事したり、訪ねて行っておしゃべりしたり、私小唄とか三

味線もやってるんだけど、それ教えてって言われて教えたり。対面朗読のボランティアもやったかな。特にきっかけってわけではないんだけど、私には中途失明した伯母がいて、その子、まあいとこね、その子に「将来子供の手が離れたら、何かボランティアをするといいよ」っていわれたことはあるの。なんか不思議ね。



## よしだ

20代、未婚。女性。  
趣味はカホン。  
黒髪に切れ長の目尻。

何も無いところで、自分ってどうなのかな？ って

書き手 || たまちゃん

残業することが当たり前だったんで、引っかかりすら感じなかったんですけど……。理学療法士<sup>\*1</sup>の仕事でもらうお金って、単位数に応じて、なんです。一単位二〇分で、それを自分で組み合わせて、一日のスケジュールを組むんですけど、その二〇分に、カルテを書くことも含まれる。一〇分患者さんに接して、一〇分カルテ書いても一単位、二〇分接して、一〇分カルテ書いても、同じ一単位。だから、サービスクラスは普通っていうか、そういうもん、って感じでした。

他にも病院で働いてると理不尽なことが、すっごい多いんですよ。もし、「やりがい」が勝っていたら、それでも仕事を続けたと思うんですけど、「もういいかな？」って。

例えば……ですか？ 看護師さんとのやり取りでカッチンときたのは……。

廃用症候群って分かります？ 筋肉を長い間使わなかったために、機能が落ちちゃったり萎縮したりして、動かせなくなっちゃう状態なんですけど。

で、病院は、もう治療自体は終わって退院させたい患者さんがいて。でも、廃用症候群とかで、まだ、ひとりできないことが多くて、家に帰っても大変になるから、家族が難色を示している。それをできるだけ早くリハビリでなんとかして、みたいな要望(?) がくるわけです。でも、二四時間の内の二〇分

ですよ。それだけじゃ無理です。それで、看護師さんに、例えば、ベッドの横にポータブルトイレを置いてもらって、その都度、そこに移って用を足すだけでもリハビリになるんで、その時、ちよつと見守りをお願いしていいですか？ っつて、「これだけは協力、お願いします」みたいな頼むんですけど。そうすると、「いや、それは困る。その度、ナースコールされても対応できない。こっちの仕事もあるんで……。それより、リハビリの時間とか頻度とか増やしてよ」とか言われて、「いや、私、ひとりですから……。手が回らなくて無理なんですよ」みたいなやり取り、ありますね。

あの人はちよつと……みたいな看護師さんは居ますよー。やつぱり。患者さんの回復は、どういうスタップを引き当てるか、でも変わるんで、患者さんの運はありますよ。

四年近く働きました。四年つて言うと、お母さんに「三年と一ヶ月でしょ」つて怒られる。

働き始めて三年目に、自分が目指すべき道がちよつと分かんないなつて思った。三・一の時に、理学療法士が派遣されるわけですよ。理学療法士協会が主催しているわけなんです、その条件が五年目以降。行きたいと思っただけ、行けなかった。

大学で先生に、「三年目から消える人と、三年目から頭角を現す人がいる」つて言われてて、そのことが頭にあつたのかもしれない。うちの病院、のんびりしてるんですよ。「どうしていけばいいんだろう、私」みたいな。こんなしてちゃ、もつと勉強しなくちゃ、いけない……と思うんですけど。

患者さんは来るんですよ。その人たちへ対応さえすれば済んじゃうんですよ。

いるんですよ。なかには仙人みたいな人が……。

患者さんが歩いているの見るだけで、あそこが悪いんだとか、バツと分かつて、その人が二〇分リハビリやると、患者さんがガラッと変わる。そういう人がいるんです。

そういう人が二〇分やるのも、働きだして三年の私が二〇分やるのも、患者さんは同じお金を払つていて。患者さんは仙人みたいな技術がある人の存在は知らないわけです。

その技術の溝を埋めるためには、すごい努力して、勉強して経験を積み続けるしかないんですよ。でも、そこまでの情熱はないつていうか、そこまでは向いていないつて気がして。環境のせいにしたらいけないけど、職場がぬるくつて、がんばつて勉強しなくても仕事はできていたから、大病院でバリバリやってきた人と、もう差がついちゃつて、「勝てないケンカに行かないぞ」みたいな。前は勉強会とかも行つたりしてたんですけど……。自分がやめても代わりはあるな、自分が向上心を持たないことに対して、誰も何も言わないな、つて思いながら、情熱を傾けてない自分が、自分でも嫌でしたね。

自分は病院では、理学療法士という立場があるから、白衣に守られているんです。みんな、感謝はしてくれますよ。でも、自分の力で勝負している訳ではないと感じてたんですよ。それなしで、何もなしとこころで自分つてどうなのかな？ っつて。

軽い気持ちで辞めたんだと思います。

自分は、基本的に病院で働いていた時は人生経験豊かな人達に接していたのに、今は、「楽しければいいな」って毎日です。無責任な日々ですね。

\*1 理学療法士…ケガや病気などで身体に障害のある人や運動機能が低下する高齢者などに対して、日常生活を自立して送れるように医学的な見地からリハビリテーションを行なう専門職。

## ポラン

宮沢賢治が好き過ぎてあだ名はポラン。  
機関車みたいにパワフルなアラフィフ女性。  
ちょっぴり女優、しっかり先生、メイク次第では少女にもなる。

## 全盲小学生のまあ君の先生になったポラン

書き手 || チャコ

私は二十年前に文京区の非常勤講師をしていて、全盲のまあ君という小二の男の子の担当になりました。まあ君は先天性の視力障がいを持っていましたが、ご両親の考えもあり盲学校じゃなくて普通学校に通っていました。全盲児童が普通学校に通うのは全国で初めての試みだったそうです。

すごく記憶に残っているんだけど、初日の朝礼の時、担任の先生の、「まあ君の先生が来たよ」の声にまあ君が振り向いて大きな瞳をくるつとさせたその瞬間、「うまくいくー」って感じました。なんていうか……直感。小学二年生から小学校卒業の少し前まで受け持っていました。

小学生の子供って学校生活の中で、「まあ君、見てごらんよ」って言うこと、よくあるのよね。そういう時、言っちゃってから、「あつ、見えないんだ」って気がつくんだけど、敢えてそういう時も私は静観していました。

小学校五年生のときの八ヶ岳移動教室の三日間には沢山の思い出があります。牧場では私はまあ君の手を取ってやぎ、羊、豚、豚の赤ちゃん、鹿、牛、馬となでて回りました。はじめは怖がっていた他の子も、まあ君が動物を触っている姿を見て恐る恐る手を出していました。移動教室の二日目の山登りのことです。疲れてべそをかき始めたまあ君に、隣のクラスの女の子が声を掛けてくれたんです。

その子の言葉に励まされ、頂上まで登ることができました。キャンプファイヤー、フォークダンス、夜の肝試し大会では闇が怖くないまあ君がみんなをリードしていました。他の子とかかわって沢山の経験をして、真っ黒に日焼けしたまあ君にお母様もうれしそうでした。

普通学校で学ばせたいというご両親の希望の是非はともかく、今と違って二十年前の当時の受け入れ態勢の整わない学校や理解のない管理職との問題もありました。でも私自身この期間に出産もしました。

まあ君のお父様は生まれてきた我が子の目が見えないと判ったとき、「何のこれしき。命があるじゃないか」と思ったそうです。

クラスに障がいのある子がいることを、健常児の障がいへの理解として捕らえる風潮は決して悪いことではありませんが、「障がい者は健常者の教材じゃない、でも分けてしまうと分かり合えない」という考え方に、この現状の正解のない二面性を感じます。

まあ君や、まあ君の一、二年生の子の担任・松元先生とも、今も時々連絡を取り合っています。

## 絶対、うまくいくな

書き手 〓 いまむ 〓

盲学校の高校に産休代替教員で入ったことがあったんです。その時の校長先生から電話があつて、「小学二年生の普通学級のクラスに全盲の男の子がいるから」って。

今では普通なんだけど、二十年前だから当時では都内で初で、もしかしたら全国初くらいだったのかも。重度の障害児が普通学級に通うことが認められなくて、無理矢理、入れる感じで。一年生のときはお母さんが「私が連れてく」って送り迎えてただけど、でも倒れてしまつて。それで私が二年生の二期から入ったんだけど。

忘れないのは、朝礼の時に、友達がまあ君に、「まあ君の先生が来たよ」って言ったら、まあ君が耳を傾けて、大きなかわいい目をクルツとしてみて。それで私は、「あ、絶対うまくいくな」って思った。

その学校は、管理職の先生方はまあくんを受け入れるのに絶対反対でした。校長先生ですごいのが、まあ君のお母さんが、「子どもを普通の環境で育てたい気持ちが変わらないんですか」って聞いたたら、「身内に障害者がいないからわかりません」って言ったんだって。

友だちが、「まあ君、見てごらん」ってやるんだけど、途中で「あ、そっか」って気づいて手を取つてやつたりとか。私は口を出さないんだけど、あとで他の先生とかから仕事してないと思われる。もとも

と見えないから、見えることがわかんないんだよね。大人は、「あつごめん、そういうつもりじゃなくて」って墓穴掘っちゃうんだけど、子どもはそのまま教えようってなる。

学校では、「トイレ行かないください」ってくらいまあ君にはりついていたので、盲学校の方が自由だった。まあ君が六年生になるまでいたんです。その間に子どもも産んでるから、自分で代替の人を見つけて産休を取って。

まあ君のお母さんがやってたことは、正しかったと思います。でも体制が整っていないから。週に一回、放課後に国立盲学校に行く日があつたんだけど、先生たちも専門の教育を受けていて、やっぱり全然違って。まあ君の自立を考えると、整ってるほうがいいのかなって。

まあ君は今、施設に入ってる。やっぱり自立ができるようにって。二年生の時の担任の先生と三人で会つて、ケーキ食べたりもして。まあ君はエピソードを全部覚えてて。

私、最後までいるつもりだったけど、六年の途中でやめて、卒業までいられなかったんだ。後から来たのが男の先生でよかった。まあくんの体も大きくなるし。

それで、まあくんのお父さんが感動的な文章を書いて。卒業の時かな、みんなが寄せた文章に、「目が見えなかった。なんのこれしき。命があるじゃないか」って。小さく産まれてきて、生死をさまよつて、命があるじゃないかって。

晩年、ガンになった校長先生が、まあ君に謝罪の手紙を送ってきたんだって。それでもお母さんは怒つてたけど。人は自分が弱くなつたら変わるのかな。その手紙も点字で打つてあつたって。

## うつちー

40代、キュッと小柄な女性。  
緊張しい。おどりたい。  
ひとりでより、誰かと観劇するのが好き。

## ひとりで ふたりで

書き手 || いまむー

まず息子のタクミについて、話してもいいですか。この中で自閉症の人に接したことがある方はいらっしやいますか。大人になってもね、理解されにくい。コミュニケーションが取りにくい障がいなんだからべらべらしゃべれる子もいるけど、一生介助が必要な生活になるんですね。

うちの子が自閉症かもしれないなって分かったのは、三歳から四歳にかけて。最初は知り合いに、「タクミくん大丈夫？ 視線がちよっと合わないね」って言われて気になって。ただ、うちの子は三月生まれで、その頃は成長に幅があるから。でも言葉がうまく話せないし、多動もあって、目的がなく動くから終わらない。

主人は、結婚前からなんだけど、仕事が忙しくて。夜どころか一日いないから、相談する暇もないくらい。土日はいるんだけど、疲れてるだろうからっていうのもあって。ひとりっこで初めての子どもだから、初めての育児と自閉症の育児と。

世田谷区立の幼稚園で、障がいのある子に先生をつけてくれる制度が運良くあって。その園は「タクミちゃんのペースで。無理して人の中に入らなくてもいいよ」って言ってくれて、本人も楽しんで毎日、

行っていました。幼稚園だから二年保育で、その間に二回、脱走事件おこして。非常用滑り台を逆走して、屋上に上がっちゃって、その屋上、柵がなくて。他のお母さんたちが「あー！ タクちゃん！」って。「えっ」て見たら、屋上にポツンと立ってたの。先生たちも真っ青になって。その時はなんか落ち着いて、おとなしく下りただけけど、その後もまたやって。心臓が止まりそうになる事件が、何度もありました。自転車に乗せるときとか、家の中でしか安心できる感じがなかった。紐でくくりたいって毎日、イライラして。

私とふたりのときと、お父さんがいる週末三人の時とは、本人が別状態。お父さんが好きで、いるだけで落ち着いちゃう。「もう、なんであんた、危ないことしないの？ 私の前だけで」って感じなの。私が主人にこうでこうでって説明しても、「大変だねー」って。そうやって、怒りが溜まっていったんでしょよね。

小学校はたまたま歩いて行けるところに、特別支援の学校があつて。それで愛の手帳<sup>\*</sup>を取って入って、そこで六年間過ごしました。そこは世田谷区のなかでも人気の先生がいて、他のお母さんたちとも相談したりして。親がいろいろやって、先生たちとも連絡し合つて。先生たちも頑張ってくれて、その六年間は本当によく。親たちも「この学校でよかった」って言うくらい。ボーダーの子も、軽度から重度まで集まって、私もいろんな子を見られたし、相談もできたし。だから、お父さんよりも、お母さん同士で助け合ってる感じ。

その時期にすごい力が伸びたんですよ。理解力とか人と話すのとか、段違いに伸びたんですよ。多動が劇的に変わったのも、その時期で。先輩のお母さんにも「大きくなったらよくなるから」って言われて、「そんなことないだろう」って思ってたんだけど。入ってみたら、もつとすごい子もいて、うちなんか軽い方だなんて。ここに入って初めて分かった。だから育てるのに、だいぶ助かった時期でもありましたね。一〜二年は大変だけど、三〜四年で「あれ、落ち着いてきた？」って。五〜六年で普通に歩いて、座ってられるし。会話もだいぶラクになってきて。ある程度、自分の意志を言えるようになって。本人のなかでもよくなったかな。

ただ、主人、お父さんとは週末のみだったので。他の家を見ていると、お父さんが結構心配していて、私もやっぱり一緒に心配してほしいって思いがあつただけど。子どもの状態、分かってもらうのが難しく、ビデオを撮るしか。だから取材が来てくれないかなって。言葉で伝えるのがやっぱり。

私としては帰ったら「どうだった？」って気にしてほしいんだけど、すぐ寝ちゃって。だから夫婦で話す時間がとれない。週末はあつという間に終わるから、そのまま一年、二年、三年。主人は、障がいの興味ないから分からないままで。

だから良くも悪くも、息子が自閉と分かった時、あんまり慌でなくて。落ち着いてるっていうか、どういふことか分からなかったのかな。私もそうだったけど。私は結局、障がいとかについて知っていかがざるをえなかったけど。主人の考えと私の考えと、どんどん差が開いていって。私というお世話係がいる

から、「まあ、大丈夫だろう」って任せきりで。

健常者の子どもがいないから分らないけど、普通の家だといくら仕事が忙しくても、子どもが問題を起こしたら男親も心配するんじゃないかな。うちの主人は楽観的というか無頓着というか、「なんとかなるでしょ、あんたいるからね」って。最近はお父さんが子育てをするけど、典型的な昭和のお父さんで。家庭環境のせいもあるかな。考えていくと根深くて。

私も大変だけど、息子も辛いんですね。お父さん大好きなのに、会えなくて。お父さんが単身赴任した時、朝、お父さんと会うってサイクルが変わって。自閉の子って同じサイクルを好むから、幼稚園で泣くようになっちゃって。他の子が「お父さん」って言うのを聞くと泣いちゃうって先生から。自分で「なんで、お父さんいないの」って聞けないから、溜まってしまって辛かったのかなって。彼には申し訳ないことしたなと思うんですけど。

出張が無期限だったんですけどね。だから私もどうしようかなって。それで主人に言ってみても、「そっか」って考えてくれなくて。でも、主人も調べたりする余裕がないのかなって、私も収めてたんですよ、その頃は。

その頃、主人は仕事でもトラブルがあって、それに対してもあっけらかんとして、それがショックでした。そことタクミを結びつけたりして。私のなかでは根が深いんですけどね。この人の場合、弱い人に対する意識が私とは違うっていうか。目の前に困ってる人がいたときとか、人の痛みを分かる感覚がちよっとニブいのかなっていう、見て見ぬふりなのかな。

私の意見を聞いてくれなくて。まあ一方的に言っちゃうとね、主人の言い分もあると思うんですけど。彼は、「俺はこうだから」でいいけど、私としては、それまで一生懸命、話しているんですよ。それで思いが強すぎて、シャッター閉められちゃうのかもしれないけど。「なに言ってるの」ってなっちゃうから。そこが辛いんですよ。話にならないんですよ。

もうひとり、いてくれないかなーって。上の子がいたりとか。うちは人の出入りがなくて、核家族なんです。だからちよっと、夫婦カウンセリング受けたいくらいの感じになってます。前に三〜四年、カウンセリング通ったんですけど、相談ってパワーがないじゃないですか。だからママ友にはね……。

主人は、「言われれば、やります」なんです。今までタクミとふたりでなんとかやってきて、主人もそれを近くで見てるはずなんです。でも「言われればやるよ」で。「なんとかなってきたので」「大丈夫でしょ」って感じで。私は「そうじゃないんだよな」って。二一年なんとかここまできて、やっとこれからでしょって。

ガラケー持たせてるんですけど、安全のためにケータイを教えなきゃって言っても、「ああそうか」って。「私が教えるのか」って。困ってるっていうか、押しつぶされそうです、ほんとに。

これだけは言いたいのは、一生懸命働いてくれて、ありがたいと思ってるんですよ。会社のストレスとかも、同僚と飲みに行ったり。「でも回数、多くない？」って。「早く帰ってほしいな」って思ったり。でも責任ある仕事だから、大変だろうなって。弱い人に対して上から目線ってところもあるので。でも私のことも考えてほしいってところがあって。タクミは毎日これやって、あれやってって、やらざるを



えないって感じて。

このワークシヨップの時に、私もタクミと一緒にサポートされる？ 介助されてる？ ってことになるのかなって。ケアする人とか、ヘルパーとか、知り合ったばかりの人と共有するのもすごい大変なんですよ。

抱えてるモヤモヤ・イライラをどうすればいいんだろうって考えるのがつらい。私、今度は、私がいなくなったらタクミがどうするんだろうって考えなくちゃいけないから。

\*1 愛の手帳…知的障害の人に交付される東京都が発行する手帳。東京都が独自に設けた制度で、1度から4度の障害の程度によって交付され、この手帳を持つことでさまざまな手当や制度を活用することができる。

## 困ってるどころじゃない

書き手IIやまも

主人との間はケンカばかりなんです。こちらの気持ちを理解してもらおう、理解し合うのが難しい。私もすぐ怒っちゃうし。

息子が自閉症なんですけど。

自閉症って、介助の度数にもよるんです。たくみは3度で。1度、2度が重度、3度は中度なんですけど。大多数は会話ができなくて、誰かに助けてもらわないと仕事、勉強……なんにもできなくて。一生介助が必要なんです。

たくみは三〜四歳のころに自閉症ってわかって。

友達でそういう仕事している人がいて「たくみくん、目線が合わないね」って言われて。それでわかったのね。

部屋の中の机をぐるぐる回る回って、ずっと止まらないのね。目的がないから止めるまでやって。多動はひどくなっていったんですね。

それで、総合福祉センターというところに行つて。そこが自閉症の入り口ですかね。月二〜三回集まつて、集団で過ごすんですけど。その療育時代のことは全く覚えてないのね。二〜三年後に、当時の人

と別の施設で会って「内田さーん」って言われて、全然わからなかったの。もう周りに誰がいてとかわからないくらい、「たくみを見てないと、見てないと」ばっかりだったから。

主人はサラリーマンで、朝八時頃でかけて、終電とかタクシーで帰って来る生活だったの。今もずっとそうなんだけど。私は専業主婦で、私が全部たくみの面倒みてて。全部ひとりでやらなければいけないって。子育ても素人だし、障がいも素人で、ほんと困った。土日は主人も家にいたんですけど、一生懸命仕事してくれてるのにあんまり頼るのも悪いな、という思いもあって。

幼稚園は、近所の自転車で通えるところに行けて。そこは区立で、障がいのある子にひとり先生を付けてくれる制度があつて。二年保育に行きました。初めて集団に入ってたんだけど、部屋の中でみんなが遊んでるのに、ひとりだけ外で遊んだりしてた。

幼稚園の二年間で、二回脱走したのね。裏門から出て、屋上へ上がっちゃって、入れないような柵があつたと思うんだけど、乗り越えたのか、開いてたのか、わかんないんだけど。屋上はそれこそ柵もなく、へりに立ってるのを、ほかのお母さんが見つけて「たくちゃん」て。私は「なんであそこに立ってるんだろう」って思ってた。それで先生とかが行つてつかまえて、大丈夫だったんだけど。「気をつけます」って先生も言ってたんだけど、もう一回あつて。まったく同じことが。

そういう、心臓が止まるような事件をいろいろやってくれちゃって。命に関わる危険があるから、自転車に乗せる時と家にいる時以外はずっと見てなきゃいけないって。もう、ひもでくくりたい！ っていう。毎日イライラしてた。

小学校は特別支援学級<sup>\*</sup>が併設されているところが歩いていけるところにあつて。その頃に「愛の手帳」を取って。「3度ですわね」って。障がいがあると普通には小学校に入れなくて、区役所の学務課に行つて、見学に行くんですね。

その小学校に入る前に先生と話した時、たくみがビューって屋上の方に行っちゃって、「あー行っちゃった」って思ってたなら、主任の先生が「大丈夫ですよー、あははー、たくみくん」て追っかけてくれて。それでここいいかも、と思った。

その主任の先生がものすごくよくて、教育委員会にもバンバン言う人で。先生たちのチームワークもいいし。四十人近くいましたね。評判がいいから遠くからも希望があつて、学校もどんどん受け入れて。そういう学級って、幼稚園のときと一緒なんですね。親がすごく関わる。それこそ連絡帳もあるし、送り迎えもあるから、毎日、顔を合わして。ほかのお母さんたちとも仲良く、助け合つて。その六年間は、いい六年間でしたね。ほかの親たちもそう言ってた。

その時期、力も伸びたんですよ。人との関わり方も。多動が変わったのもその時期で。ほかのお母さんから「大変なのは今だけよ」って言われてたんだけど「そんなわけないー！」って思ってたんだけど。一〜二年は多動で。三〜四年生になったら教室でもじっと座っていられるし。五〜六年は行き帰りの

普通に歩くし。卒業前には多動はなくなった。簡単な会話だったらやりとりができるようになって。例えば「ごはん、なに食べたい？」とか「〇〇行こうね」とか、受け答えができるようになって。学校で揉まれて、力がついてきたのはありがたかったですね。

でも、他の障がいを持っている子のお父さんを見ると、障がいがあるってわかった時に一緒に悩んだり泣いたりしてて。将来のこととかも、中学生になるっていうときとか、一緒に考えてほしかったな。

最初は、私も何もわからなかったんだけど。でも、興味も関心も広がってっちゃう。見ざるを得ない。主人はほかの子供を見る機会もない。福祉の方への関心もない。何かあってもうるたえないし、夫婦で探し回ったりしないんですね。

実際「なんかあったら、あんたがいるからね」「お世話係はあなたでしょ」って言ってて。「どうしたらいいんだろうね」とか「いい病院あるのかね」とか一切なくて。

長期で、主人が遠くに仕事に行かなきゃいけないことがあったんですね。向こうに住んで。たくみが幼稚園の時なんだけど。その時は私も大変だし、息子もつらい。お父さん大好きなのに、お父さんがいない。

自閉症って、同じことを繰り返すという特徴があるんですね。繰り返したい、という。それまでは夜はないけれど、朝起きるとお父さんがいて、三〜四十分くらいは必ず会えるという生活だったんですね。でも急に遠くに行って、帰ってこない。「お父さんいない、お父さんいない」って。でも金曜には帰って

きて、また日曜に戻る、という生活だったんだけど。本人もさみしいことを家では言えなくて、幼稚園の先生から「泣くんですよ」って聞いて。どうもほかの子が言ってる「おとうさん」で言葉に反応して、わんわんぎゃんぎゃん泣いてる、って。それを主人にも言ったんだけど、「そっかー」「週末は帰るから」で終わり。

弱い人に対する意識が私とは違うんだな、って。人の痛みがわかる感覚というか。自分の理屈があって、私の考えを言っても聞いてもらえないの。「ぼくはこうだけど、あなたはこうなのね」って考えてくれるということがない。自分に自信があって、考えを曲げないんですね。「一緒に考えたい」ってときに困る。それこそ「話にならない」から。「わかるけど」ってというのがあればいいんだけど、それすらなく。

人との付き合いが全くないんですね。実家も遠いし、いとこに会うとかも正月くらいで。来るとしたらヘルパーさんが来るくらい。人が入ってこない家なんですね。

たくみが小五から中学生くらいの時に、三年くらいカウンセリングに通ってたんですね。私が。通い始めたのは主人のひとことで、わかってもらおう、という話すなかで「もうちょっと優しくしてくれてもいいんじゃないの？」って言ったたら、「優しくされて何が嬉しいの？」って言われて。ダメだ、って。

それで他人のほうがいいなと思って、毎週一時間、個別に。いろいろ話をするって感じで、精神的なケ

アのほうは全然ない。

夫婦カウンセリングを受けたくて、主人に相談したら「何でそんなことしなきゃいけないの？」って。「あなたのこともあるんだよ」ってはっきり言っても、悩んだりとかしないんですよ。

結局カウンセラーの方と三人で話す、ってなったんだけど。なに言ってもピンとこない。「何でそういうふうと思うのか、わからない」って。カウンセラーの方もフォローしてくれるんだけど、主人は「大丈夫でしょう、今まで何とかなってきたるし」って。苦勞して苦勞して二年かけてここまできたのに、それを見るはずなのに……わからないんですね。

今、たくみにケータイを持たせてるんですね。でもまだ使えなくて、教えなきゃ、教えなきゃ、って思ってるんだけど。「教えてあげてよ」って言っても、「ああー」で終わり。「私がやんなきゃいけないのね」ってなって。

抱えているイライラ、モヤモヤがづらい。「これこれだから気にしないでおこう」って思わないと、考えなくていい。もう、困ってるどころじゃない、押しつぶされそうです。

\*1 特別支援学級…学校教育法の規定に基づき、通常学級での学習では十分に効果を上げることが困難な場合に、特別に編成された学級のこと。東京都では知的障害、肢体不自由、自閉症・情緒障害、病弱の特別支援学級が、一部の小中学校に拠点的に、固定制で設置されている。

## うろたえない主人

書き手 〓よしだ

今は困っているってか、押しつぶされそうなのよね。真っ白になっちゃった。何を話そうかなって。

うーん……何から話していいか難しくて、何から言えばいいのか。

とりあえず、夫と息子のこと。夫に対して息子のことを話すと、すぐに私が怒っちゃったりして、喧嘩になるんだけど、それもまいっちゃってね。うん、理解し合うことができたらいんだけど。

息子には自閉症があるんだけど、自閉症ってどんなかわかる？

自閉症っていつても人によって症状は様々で、うちの子の場合、会話がスムーズにできなくて、理解されにくくて、コミュニケーションも取りにくい。だから、誰かの助けが必要で、言っちゃえばこれから一生介助が必要になるのね。だけど、少しずつできるようになることもあつてね。何年もかけて同じことを繰り返して学ぶってことを、私と一緒にやってきたんだけどね。だけど、夫にはそれがわからないのかなあ。これからのことを考えて、息子に携帯の操作を教えるって、夫に言っているところなんだけど、全然やってくれなくてね。

うちの子の自閉症は、三、四歳にかけて幼稚園に入る前にわかったの。目線が合わないし、多動がひ

どくて。あ、多動って意味もなく動いちゃって、それが永遠に終わらないの。だから、外に行ったら手が離せなくて。主人は仕事で毎日八時前に出勤して一時過ぎに帰宅する生活をしてたから、家の中のこととはひとりでやらなきゃいけない。主人も一生懸命仕事してくれているし、初めての子育てが自閉症の育児でいっぱい、いっぱいだった。

三十代だったからなんとかやってたんだけど、あんまりその時のこと覚えていないんだよね。自分でもびっくりしたくらい息子を見てないと、見てないと！ ってなっていたのね。

幼稚園の頃は、多動が続いて、二年間で二回、脱走事件を起こしてね。どう行ったかわかんないんだけど、幼稚園の屋上にぼつんと立ってたりとか、命に関わる危険なこと、心臓止まるような事件をいろいろやっちゃって。だから、自転車に乗せているときと家にいるときにしか安心できなくて、息子を紐でくくりたいって、毎日毎日、イライラしてた。主人にはこの様子を言っただけで、彼が見る息子は休日の家にいるときだけで、お父さんがいると息子本人は落ち着いちゃうの。平日とこんなに違うのかってくらい。だからうちの主人、そういう危機的な頭がなくて。こう考えると、息子が小さい頃からの怒りの種が蓄積されたんでしょね。

小学校は家から歩ける距離にあって、運よくその小学校に併設している特別学級に入ることができたの。しかもその特別学級の先生方がすごく受け入れがよくて、その時期、息子の能力もすごく伸びて、入った時と段違い。多動が劇的に変わった。ほかのお母さんに大きくなれば少し落ち着きますよって言われてたんだけど、申し訳ないけど信じてなかった。

だけど、三〜四年生で落ち着いてきて、あれ、なんか、こんなに変わるものなのかって。

五〜六年生でちゃんと授業で座っていられるようになったし、多動がなくなったし、会話も簡単だったらできるようになって、それもすごく楽になって。息子が自分の意思を言えるようになったのね。だけど、やっぱり日常的にはそれなりに問題が起きて。

主人はあいかわらず息子をみるのは休日のみで、ほかの家族をみると、奥さんと一緒に旦那さんも考えるし、心配してるんだけど、毎日仕事して疲れているだろうからって、そういう息子の様子を伝えられなかったの。伝え方、難しいのよね。だから、うちの子に取材でも来てくれたら、ドキュメンタリーみたいな感じでビデオを撮ってもらって、それを見てほしかった。今はビデオとか簡単に撮れるけど、昔はスマホもなかったしね。やっぱり私、ひとりで対応するしかなかったの。

本当はちゃんと話を聞いてもらいたいっていう気持ちがあったけど、夫婦で息子についてちゃんと話し合える時間がとれなくて、あとで話そうと思っただけで、日々の忙しさで今まで過ぎてきたのかも。

夫には感謝してる。彼が一生懸命仕事しているから、生活ができていくわけだし。だけど、主人とは考え方の違いがあつてね。余裕があるときはそれを思いやれるんだけど、その余裕が今なくなってきたら、さうなるんだろうな。

息子の自閉症がわかったときも、良くも悪くも主人はうろたえていなかったのね。これはあとから思ったことだけど、うちの主人、人の痛みを分かる感覚が鈍いのかなって。ほかの人に聞いたら夫婦で泣いたとか、必死でどうしようかって夫婦で相談したっていうことが多いんだけど、うちの主人は「ああ、

そうなんだ。なんとかしなければ」くらいで、常に受身なの。「言われればやりますよ」のスタンスで、自主的にはやってくれないのね。だから言葉も態度も無頓着にみえて。私も子育て自体が初めてだったし、それに加えて自閉症のことがあって、どうしていいかわからなかったけど、育てている過程で見なければいけないこととか、知らなければいけないことが広がっていったけど、彼にはそれがわからなくて、私と主人との間が離れちゃったかなあとも思う。

主人は息子と私のことを一番近くで見ているのに、わかってくれているはずなのに、でも今まで何とかなってきたので大丈夫でしょって。だけど、私はそうじゃないって思うところもあるし、息子だってこれからまだまだなんだよって。「わかるけど」っていう言葉を主人から一切聞いたことがなくて。これからも私だけがやらなきゃいけないのかって思っちゃうとさ……。

一緒に考えられないのが辛いし、大変な部分をわかってもらってすごい大変なの。ただ、私はわかってもらうために言うしかないから言うけど、こっちの気持ちが強すぎてシャッターを下ろされちゃって、跳ね返されちゃってるのかな。だけど、この矛先をどこに向けていいかが決まらないのよね。

## やまも

30代男性、3歳児のパパ。  
趣味は保存食(みそ、らっきょ、梅酒、ジャム)を作ること(時間をかけて美味しくなるって最高だね)、おやつは素朴なナッツが好き。  
ハーフ疑いの印象的な目鼻。

## 痛風にふかれて

書き手 〓よしだ

今はそんなに困ってないけど、改めて話すと、今後のために気をつけようって思えるようになったのはよかったかな。激痛のピークの時は、タクシーの振動でさえ痛くて、薬も効かなくて大変だったの、ある程度時間が経って痛みもなくなると、特に気をつけなくなっちゃって。

そう、いざ自分のことになる、気をつけなきゃいけないことでも自制できないんだよね。でも、自制できないのがっかりじゃないんだよ、びっくり。なんだろう。本当にわからないっていうか、忘れるんだよね。痛みでできることが限られるから、やれることとやらなきゃいけないことのせめぎ合いで、ギリギリだけなんとかやれちゃって、考えることを放棄しちゃうところがあるよね。

痛みが強かった日に、息子に「はん食べさせてただけど、食べたくないってダダこねられて、「じゃあ、もう勝手にしろよ」ってスプーン、バーンってやつちゃって。毎日寝る前に息子に絵本を読むんですよ。三冊。それもしなかったしね。

いま気をつけてることは、水分をしっかりとることと、食事。食事は、肉はあんまり食べないで野菜を多く食べたいのね。俺は。そういうことを周りに理解してもらいたいわけでもなくて、わかっただけ、ほっといてもほしい。なんか不思議よね。

## よろこ

髪型はずっとショートカット、めがね。  
昔は伊勢丹でおしゃれお洋服が買えなかった。  
コーヒーよりビール好き。

## 抱え込んじやう愚かさに

書き手 〓よしだ

母の葬式の次の日だったから、まったくもって自由になったなって、ペラペラ話したのは覚えているけど、何を話したかは覚えていないな。家の話は複合的などころがあるし、渦中にいるとすごく閉ざされちゃうんだなって、改めて。

今は、母が亡くなって、一番は父の介護かな。

兄は別口で住んでいるのね。ああ、食事の時には兄が家に食べに来るようになってるけどね。ほっておくと同じものを食べ続けているから、年も年だし、糖尿病とかの問題も出てきてるしね。

兄の食事のことは、母はいつも気にしてて、最後までやりたがってた。認知症が進んでも母は、「あの人はどうなるんだろう」って、最後まで兄の面倒を見たかったんだよね。私が母に「兄を家で見るのは不可能です」って言うても、「この人はかわいそうな人です」って、自分だけで兄をなんとかしようとしてね。

私は母に「お母さんが死んだらどうなるのさ」って怒ってた。そんなこと言うとなんてこと言うんだ」って言い合いになってね。兄のことを「かわいそうだ」と思う母は、母親として兄を見てなくて、自分が見たいようにしか兄を見ていないんだってことに腹がたつたんだよね。だけど私も仕事場で利

用者さんを「かわいそうだ」って思うときもある。建前で怒ってたんだって。そういう時、私、青っちなって、思うよ。

母は平気で兄のことを人前で「この人は精神障害者です」って言うの。

周りは何んともわかっていないから、そんなことはつきり言われるとほんと、ドン引き。引くよね！

私「本当にやめてください」って何度思ったことか。

なんでみんながわかっていること、いちいち言わなくてもいいこと、なんでわざわざ言うんだろうって。でも言わずにはいられないのも感じてはいた。

兄は一七歳で学校に行けなくなったのね。電車に乗れなくなってさ。それがはじまりかな。

当時は医者病名をつけたがらなかったし、兄も若かったからさ、ノイローゼとか、神経症とか曖昧なまままで病院を行ったり来たりして。それでも全然ダメで。

四年くらいしてから、統合失調症って診断がついたのね。だけどそんな兄に対して母も父も「私かなんとかしますから」って。私には「あなたは妹なのだから、静かにしてくださいね」って。それでも度々トラブルは起こってたからね。その度に両親が「何とかします」って言うんだけど、何にも変わらないのに、そう言って抱え込んじやう愚かさがすごく嫌だし、怒ってた。うちの両親は多分、病識を持たなくなかったの。昭和一桁代の人たちだから、家族の問題は家の中だけにしておこうっていう固定観念が強くて。時代だね。知識があれば周りからサポートがあるかもしれないのに。でも、その状態だと家



族の中で行き詰まっちゃうの。兄がひとりいるだけで、何をするってこともないんだけど、負の力っていうのかな、それが強すぎて、周りはエネルギーを吸い取られていってね。どんどんいきづまるのに、当事者たちはそのことを大変だとは思わないの。家族は頭の中で、もつともつと最悪なことが起こるんじゃないかって、考えて、その考えに怯えているから。だから、家の中でなんか起こるたんびに「隣の人が警察呼んでくれないかなあ」って思ってた。

まあ、警察が来たところで、両親が土下座でもなんでもして謝って、警察に何もさせずに帰らそうとしたんだろうけど。周りから見ても起こっている問題は大変なのに「障害者だから」って、悪い意味で許されちゃってんだよね。だから私は当事者たちには無理なこと、なんで周りもつと対応してくれないんだって怒ってた。

母の気持ちは理解したいけど、感情的になると怒るし、理解を超えて黙るしかなかった。そんな感じで若い頃は家族が兄に振り回されて荒れていたから、私は結婚して家を出て三十歳前後は家族とあんまり接してなかったの。

離婚して出戻ってきたら、もう家の中で兄貴のペースができてね。その四〜五年後に母の認知症がわかったのね。母の認知症の調子が少しずつ悪くなつて「お兄ちゃん、ご飯食べた？」って、兄の部屋へ廊下を歩き来するようになってさ。うちの家はわりと廊下が長くて、廊下の一番奥が兄の部屋なんだけど、さつき聞いたこと、母は覚えてないから、廊下の行ったり来たりを、何遍も繰り返すの。最初のう

ちは私も母と、

「さあ、どっちでしょう？ 1 食べた。2 食べてない」

「2 食べてない」  
「正解！」

なんてやりとりをしてたけど、頻度が増すにつれ、そんなことも私がしなくなったし、兄がイライラしだしてね。この時が結構大変だったかな。まさに一触即発だね。兄と母の調子が悪い時が重なって、兄が母を突き飛ばしたりしてさ。結構危なくつてさ。私も兄に対して危なくなつてたし。兄貴は私がつく怒ると止まるんだよね。でも、私がつくと一緒にはいられないし、兄に理屈は無理で。兄は「お母さんをどっかに入ればいいと、俺は言ってるんだろ」の一点張りだったし。

母の認知症を理解させることも、兄のことを母に理解させることも難しくて。

母と兄は、かかりつけの先生が同じ先生だったの。家の近所のクリニクスの。最初は私も先生が同じだから、ふたりのことをちゃんと相談できて、ひとりの先生に任せることがいいと思ってたのよ。でも、見方がひとつしかなかったんだよね。これがいけなかったかなって、あとあと。

気づくのに時間がかかってさ。先生はまっとうなことを言ってくれているけど、何もしてくれなかった。ショートステイを勧めてくれたのも、母のケアマネさんでね。その頃、医療関係者に怒りすぎて、何がどうだったとかはすぐに思い出せないけど、何とかしてほしくて来ているのに「今の状態だと難しいですね」って、それで終わり。いつでも何が起こる期間なんて短いのに、起きてからしか何もしてく

れないってさ。

あとあと思えば、具体的なことをきちんと伝えきれてなかったからかとか、いろいろ調べて何ができたかもしれないけど、でも、サポートの知識があっても、何が起こってから選択を迫られるのは本人じゃなくて、家族なんだよね。何もできないのに、選択はさせられて。だから、やっぱり悔やむんだよね、あとになって。その選択を家族がしたっていう罪悪感が残ってる。いつつも、何が起こる前は究極の不安を妄想しているから、最悪のMAXが来ても「もうこれダメです」の判断が遅くなっているのに気がつかないで。何かが起こってから大変になってしまったのが、今の現実だった。

母に対しては、兄のことを抱え込んで責任を持つとうとした傲慢な所は許せんと思う。

でも、愛があつてのことだし、それが母なりの家族だったんだろなあとも思う。母はいつも本気の人だから、それが私にはわからないから羨ましくてすごいなってね。思うよ、今は。母にとつて一番ほしかったのは娘じゃなくて女友達で、わからんちんでへんちよこりんな人だったけれど、友達としてはいい人だった。

兄には恩着せがましいけど、兄は自分だけでなく、家族の力で生きている。よく生きているなって、思う。これから、本当、何が起こるかわからないけど、何かが起こつてしか何かしてくれないことに対して許せないとはつきり言えなくて、怒りは覚えるのだけれど、はつきりは言いたくない。許すとか、許さないとか。微妙な位置にいて、塩梅を見て、自分ができる範囲をどこまでかは、はつきりさせておこうとは思うよね。

## 怒りって、溜めていけるんだよね

書き手 || たまちゃん

うちは何か、本当に複合的な訳ですよ。今は母が亡くなったから（数週間前の出来事）、落ち着いて、私は家で父の介護はして、兄は別に住んでる。食事は私のところに食べに来て。でも、簡単。（兄は）同じものしか食べないから。

母がやりたかったやり方とは、全く違うやり方なんです。これからは。

母はとにかく兄の面倒をみたかった。食事のこととか。あ、今、気がついたけど、私が兄の食事のことを気にしているのは、結局、母の影響（？）なのかな？

母は、（兄のことを）「私が死ぬまで、面倒みる」って言ってたんだけど、

私は「じゃあ、（あなたが）死んだらどうするんだ」って思ってた。

それを言うと、母は「お前はなんてこというの。この人はかわいそうな人なのよ」と。

それを聞いて私は「なんていうことを言うんだ！人をかわいそうだなんて傲慢な！人間は平等なんだからって！」

お互い、「なんてことを！！」って思ってるわけよ。

でも、今、仕事場で、「ああ、かわいいそうにな」って思う時は確かにあるのね。

人は、人のことを見たいように見ている。私は、母を見たいようにしか見てないわけ。(母に) 本当に申し訳ありませんでしたって思う。

(母は) 他の人には(兄のことを)「かわいいそうな人」とは言わなかった。

「うちの息子は精神障害者ですから」って言うんだよ。そういう言い方。水戸黄門の印籠みたいに出生してるの見てさ、私は、本当にやめてほしい、そんなこと言わなかったって、みなさん、お分かりですよって思ってた。「こういう人もいるんだから」みたいなこと、分かってほしいってことなんだろうけど……。わざわざ言うのは何なんだろう。

兄は一七歳ぐらいで引きこもり始めたんだよね。私は一五歳。だんだん変になってきてるなうってなっていて、よく分かんないまま、心身症とか、ノイローゼとか、いろいろ言われて、二十歳ぐらいになって精神分裂病って病名がついて、それまで、長かった。本当に長い。

わたしは、なんでなんだろうって思ってた。家族の状況がどよんとしてしまっただけで、何も変わらない愚かしい感じ。本当に嫌いだ。親は自分が生んだ障害者の子どもは自分の責任だと思っている。障害者の存在って、でかいから、いるだけでエネルギーが持っていられるわけ。

兄が、何か攻めて来るって言って、外に出て、石投げるわけ、危ないわよ。

隣の人、警察呼んでくれないかなって思ってた。本当に来たんだけど。でも、警察が来たら、両親が出て行って土下座するわけ。「申し訳ありませんでした。自分の息子です。なんとかしますって」。すると警察はそのまま帰っちゃうわけ。なんで連れてってくれないんだ。なんとかするってどうするんだって思ったね。

……でも、なんとかはなつたわけだよ。食べて、暮らして。

理解はしてるけど、怒りたい。理解を超えたよって、思う時、多かったわよ。そして黙る。ぐっとこらえる。

怒りって、溜めていけるんだよね。

ムツとする、苛つくってのとはまた違うんだよ。世の中、苛だちのほうがよく見るわけよ。結局、自分の理想があつて、そこが違うっていう、不安みたいなの。

「怒り」は(それとは)違うんだよね。

うちの兄貴について、責任を持ちますって言った父親の横顔とか、かわいいそうって言い切った母親のこととか、許せないって思う。「責任を持つ」って、そのことが傲慢だ！ っ。でも、それを(両親に)言くと、「すみません」って言った。そう言われると、黙るしかないじゃん。

外に開かれていない、閉じたまま、(子どもに)責任を持った。

その責任を持つことが、傲慢だと思った。  
でも、それが「家族」なんだろうな。

## 母の不在

書き手 || ふくちゃん

母が亡くなったの。昨日がお葬式で。もともと長く入院していて、発作もよくあつて、病院から電話が来て、ああ、またかつて思っていたら、「心肺停止です」「えっ?」みたいな。

母と三時間くらい二人になった。

首の裏と胸の辺りを交互に触ると、最後まで温かった。

私こうやって手を入れていて、でも二時間くらいしたらやっぱり少し冷たくなってきて、手をひっこめたりして。

私、そのとき新聞読んでたの。暇だったから。というか、気づまりだったからかもしれないけど。テレビつけるのも変だし、母のからだの上に広げて、順番に読んでいって。そばを離れることができなかった。朝日新聞の挟み込みのタブロイド判みたいなのに「大人になること」みたいな見出しがあつて、あんまり読んでないんだけど、そういう意味では冷静じゃないね。その言葉だけすごい覚えてる。

母が亡くなったのが、私の誕生日の前日。受け渡されたっていうか、受け渡されて、おしまい。母の時代が終わったなど。

家族葬にしたのね。母の希望で。あと、油頭刺繍のハンカチを、顔にかけてくれて言ってたの。家族、兄弟姉妹だけにしか、自分の顔を見せなくて欲しいって。家族葬だから、ハンカチはいらなかった。葬式は、泣いたり笑ったりにぎやかだったね。

葬式の最後の挨拶を父がしょぼりして出来なさそうだから、お兄ちゃんに「あんた長男だから」って、私は言った。普段そんな感じじゃないのに、「良いこと言いなさいよ」って調子に乗ってけしかけた。「おにーちゃん行け行け」って。そしたら、お兄ちゃん、すごい母をねぎらう立派なスピーチしたの。驚いて皆で泣いた。そしたら、お父さんが「俺も言う」って。最初から言っときゃ良いのに、「えー、この度はー」って話しだして。泣き笑い。温かな葬式だった。

母が死ぬこと、すごく怖かった。でも、意外と冷静だった。

母の不在は、母が入院したときに既にあつて。それで、だんだん気持ちは母と離れていた。私と母はダメだったから。事あるごとに「あんたのそういうところが嫌い」って、ハッキリ言われていた。

母はドラマチックなことが好きっていうか、好き！ 嫌い！ っではっきり、感情むき出しでくるひとだったの。他人にはそうじゃないって、気付いていたよね。子供の頃から。結局母は、娘の私だけにむき出しに自分を出していた。母は、「自分を大事にして」って言っていたけど、「お前、大事にしてないだろ」って思ってた。母との関係は、本当に難しかったなあ。

## しら

実はリッチでイケメン男子。でもなぜかいつも短パン紳士。踊りに興味あり。やさしいよ。不動産賃貸業。40kgの減量に成功した経験有。

## 年のせいか？ ケガのせいか？

書き手||あきこ

三十代頃、一人暮らしを始めてから暴飲暴食してどんどん太った。起きると近くの中華屋さんに通った。夕食は、ほか弁二人前。

四八歳くらいで大ケガをして、具合がわるく。すぐ疲れるようになって。年のせいか、ケガのせいか？ と思ったが、左足が治ったら元気になった。

九年前に実家に戻ったが、母が炊事をやらなくなった。宅配弁当にした。

妹は実家にいた。以前、妹は精神を病んでいた。妹は老いる前に四四歳で死亡。

妹はガンになったが、抗ガン剤はしないで死亡。

淋しかった。父は七九歳で死亡。スポーツクラブに通ったりして元気だったが、突然、腰痛。

原因は判らず。介護5で歩けないので車運転、家では這っていた。困ると母を怒鳴りつけていた。

骨髄のガンがみつかる。モルヒネを打ってからは、おだやかに入院生活。

母は一度も見舞わなかった。死後、仲良くなった。

四一歳まで役者。食えるようになるまで、結婚しないと決めていた。

地下鉄に乗る時、足をふみはずし大ケガ。

一ヶ月半入院。ケイセイ外科。

五十歳すぎて、もうダメか。すぐ疲れる。

六、七年間役者をやめていたが、ある時から演劇を観て見まくり、それからまた、火がつきやってみたくなった。

最近演劇より、クラシックを聴きに行くことが多くなった。楽しい。

老いはまだきていなかった！

## 老いについて

書き手||さいとー

足を大ケガして老いを感じたんです

足が治ったら老い感じなくなった

それまでは少し歩いただけで疲れてため息ついていたのに

オレなんでこんなに疲れるんだろーって……

治って安心した 本当によかった

母は今八四 とても元気です

最近 物忘れひどいんだけど……

僕がリングむけないから

リングだけは母にむいてもらう

ごはんの時にリングむいてーって

だいぶボケてきたからなんかやらせないと思って

ボケ防止兼僕が甘えてるの

九年前 実家に戻ったんです

いま食事は宅配弁当 母と僕の昼夜二食ずつとってます

戻ってからは妹とずーっと仲よく暮らしてた

ひとり暮らしから実家に戻ったのは

親も年取ってきたし

役者やめて まー 戻るかって感じで……

それから妹がガンになって……

妹は大昔 二一歳で精神病発症して……結局、統合失調症

妹と僕は最後の七年くらいはずーっと仲よかった

その前は精神病でもう手がつけれなかったんで

正直（もー 死んでくれよ！）と思ってた

妹は四四歳で 老いる前に死んじゃった……

父親もガンだった……

妹のほうが父親よりも先にガンになって……

親父と母は妹が精神病でさんざん苦しんだんだから

抗ガン剤で苦しむの嫌だったらやらなくていいよって

僕と妹は同じ四十代で一緒に年老いてくのかなーと思ってたのに

先に死んじゃってすごく寂しかった……

父親は七九歳だったけど

年のわりには元気だったですね

毎日スポーツクラブに行つて スバがついてる

毎日運動してスバに入って帰ってきてたんですけど……

父親は根性の人 マシン使つて体鍛えて……

それが突然 腰が痛くなって

近くの医者通つてて いくら通つても原因不明で

痛い痛いって言つてて どんどん悪くなって要介護になつちやつて……

要介護5で車運転してた

右には曲がれないけど 左には曲がれるって言つて……

それで一回車で病院に行つて帰つてきた

普通じゃないですよ 根性の入り方が……

多分 這つて診察室に行つたと思います

だつてもう這うしかなかったから……

正体不明の背骨の痛みが襲つてた

東大病院で三回検査して 骨髄のガンだつてわかつて……

どんどん背骨からカルシウムが抜けて 骨がスカスカになつちやつて……

先生は抗ガン剤やりたかつたんだけど

でも本人は もう治らないから もういい 戦うだけ戦つて静かに死んでくつて……

全く穏やかになりましたね

入院してモルヒネ打つて それまではとにかく背中が激痛だったんで……

母親は父と仲良くなかつたんで……

入院してから結局一回も病院に行かず……

家で介護してた時 怒鳴られてたのがよつぱど嫌だつたらしく……

お骨 父のも妹のもまだ家に置いてあるんだけど

母親はお骨におとーちゃん おとーちゃん って言つてる

死んで いま 仲良くなった

四一歳で僕の才能じゃ無理だなどと思つて役者に見切りをつけて……

役者で食べていけるようになるまでは 結婚はしないと思つてただけ……

やつぱり恋愛とかしますね いまもつきあつてる人います



足のモモのほうに穴があいちゃって……

地下鉄の車両とホームとの間にはさまっちゃったんですよ

骨は大丈夫だったけど 内出血と打撲がひどいって言われて……

レントゲンに血の塊が写って……

ものすごいケガなんだけど 痛みはないんです

今はリンパ管からリンパ液が漏れちゃってる

ケガしたのは四八歳ぐらい 五十歳になってすぐ疲れるようになって

僕ももうダメかなと思ったけど 今は急に上向き

老いは怖かった とにかくすぐ疲れたもんで

ちよっと歩いただけでも……もうダメなのかなーと思ったり……

ヒザ痛めて半年くらい運動できなくて

そのあと大ケガして一年半くらい動けなくて

結局二年間 運動できなかった

四一歳で芝居やめて 最初の三年は

毎日スポーツクラブに行って毎日泳いで

三六五日 泳いでた

役者やめてやることないから

体重四十キロ減って 六七キロまで落として……でもリバンドした(笑)

芝居とかも全く観なかったんですけど……

ひとつの芝居を三回観に行って それから見だして どんどんどんどん

年に一〇〇回とか見るようになって 芝居を観ることは素晴らしい

やることと全く同じで本当に素晴らしい

僕が役者に復帰できたのは 世田パブがいろんなワークショップやっていて  
そこにいろいろ出させてもらって……

世田パブには本当に感謝してる 三年半前にたまちゃんの「地域の物語」\*<sub>1</sub>に出て  
そしたら「しらが舞台上に復帰したらしいよ」って 昔の知り合いに伝わって

「じゃ 芝居出ない？」とか言われて……

舞台を観ることも素晴らしいんですけど できれば出たい

最近は趣味が変わってきて 年に一〇〇回ぐらい演奏会行くようになって……

クラシック 自分でも謎 なんかよくわかんない

とにかくクラシックの生演奏を時々聴かないと気がすまなくなってきた……

クラシカ Japan も聴いてる 二四時間一ヶ月放送

芝居を観るより クラシックのコンサート一回聴くより安い

最近まで老いだと思ってた 大ケガしたせいかな

五十になったからなのかわからなかったが……

踊りへの興味は二十歳から

二十代の時 ひじかたつみ 土方巽のワークショッパに二回出て（芝居より面白いじゃん）と思ったけど

役者は仕事として選んだから優先順位として

役者のほうが大事だと思っただけ

六十歳までは舞台に立ちたい

四十歳近くになって 明らかにセリフ覚え悪くなった

そんなこともあって 芝居やめたのかもしれない

当時は認めてなかったけど いま振り返ってみれば

\*1 二〇一一年～二〇二二年に行われた「地域の物語」ワークショッパCコース「カラダの未来」のこと。振付家でダンサーの山田珠実が進行役となり、参加者が身近な人に取材、そのときの身振りや関連した音楽、写真から作品にまとめた。

## ボクの老いはまだまだ

書き手IIにけ

四一歳で、職業として考えていた役者をやめた。

その後、実家に帰って泳いだり泳いだり

三年で四十キロ減量&リバウンド

おふくろの手料理で健康的

四八歳の時足の大けが

運動二年ぐらいできなかつたから

すぐつかれるし

うごけないし

おれはもうダメなのかと

老いを実感

こわかった

でも。世田パブのワークショッパにでたりしだして  
なんかいつのまにか

# にけ

お顔はおひな様でアイラインばっちりひいて、小柄な身体で4人のママ。  
ロングヘアをボンパドゥールにしてちょっとマダム風だったり。  
こう見えて会社の大黒柱。東京と地方を瞬間移動。

舞台復帰

今は次の舞台のことで

頭がいつぱいになる日々

老いじゃなかったんだと

最近きづいた

僕の老いは

まだまだだった

## 老いについて

書き手||さいとー

四十ぐらいのときから老いのは考えてた  
どうやって老後生活していくのか？

やっぱりお金のことが心配

魚屋って今でも難しいから……

資金繰りは私がやってる

私がないでこんなことまで……って思うけれど

家業だから放り出せない

魚の仕入れは経験必要 どの仕事もそうだけど

母と私が仲悪いので 次はこーいうふうにやっていこうとか  
いろんなこと こーしようとか話せない

母はズーっと商売だけで 若い時に離婚してるから  
私はそうじゃなくて もうちょっと違う生き方をしよう と

私はお金は貯めない 使うために働く

貯金はしない

旦那が去年の十一月に家で死ぬんじゃないか  
と思うぐらい具合悪くなった

その前から 病院の検査の数値が悪いから

病院行ってね お酒はあんまり飲まないでねって

もう何回も言ってたのに 全然行かんかった

あとでなんで行かんかったか聞いたら

「行ったら死ぬと思って 病院行けんかった」

息子がひとり立ちして三年から五年たって

旦那の透析の状態も安定したら別れる

私は家庭を持つのが人生の目標だった

どうしたら食べていけるか 小さいときから考えてた

私は結局 旦那が男としてのイメージにそぐわなくなった

おじいちゃんが明治の人だから すごく遊んでただけど……

うちはひとりでも生きていくという気概は持っていたい 死ぬまで

人間関係をこうしていこうとか

先々のこと こまかく考えないことにした

悩まずに深く考えずに 人間関係はこのままでいい

ただ 自分の生活だけは

しっかりとこうしていこうっていうのはあつて……

自分の人生はなにか？ つてことを思つて生きていく

母とうまくコミュニケーションとれなかったから

そうじゃない人間関係をもう一回つくりたい

## 鳥取のけ

書き手 || しら

老後のお金大丈夫？

魚屋さん

親の家業

長男二八

離婚したい

透析夫

営業に特化

男友達

## 自分の行き先

書き手 〓 ふうくちゃん

ずーっと「老い」のことは考えてんだけど、四十歳の頃から。それまで考えなかったのは、単に子育てが忙しかったからで。

家族で魚屋さんして、毎日食べていたらいいというだけじゃなくて、従業員さんがいて、会社組織になってるから、日々、頭も身体も大変。面倒くさいからってやめても、じゃあ、お金どうするのって。結局家業だから、放り出せないんですよ。ダンナはその辺、気楽だなんて思う。自分が、自分の親から継いだのじゃないから。

私で三代目で、今、息子が入ってくれたから、四代目。でも、任せるのに五年、十年はかかる。ダンナさんは透析していて、うちの十歳くらい上で。透析は一月に始めたばかりです。手が痛いって言ってる。透析の影響は人によるみたいですね。

私は五五歳くらいで引退して、好き勝手しようかと思ってたんですけど、そういうわけにもいかなそう。お金のことをしてるのは、結局、私なんです。ダンナさんはしないし、息子は自分にはまだだよって。まあ、そうだなって。ダンナさんは、そうだね、そうしなよって、言うだけ。小さい商売は家族経営だから、大変よ。夫婦関係や親子関係がそのまま響いちゃう。

私、専業主婦になりたかったんよ。ダンナさんに仕事してもらって。普通にやれば食べていけるから。母がだんだん、私を頼ってきてたから、ちよっとお店の手伝いをしだしたら、そっちの比重が大きくなっちゃった。

うち、おばあちゃんが百歳まで生きてたの。私の「老いる」の理想は、おばあちゃんなの。八五歳くらいまでお店のことやって、その後は、お家で家族のご飯つくったりして。八月にいなくなっただけど、六月くらいまでは家にいて。食べなくなると、皆に迷惑かけられんから、このまま死ぬわーって。でも、母が、実の母が苦しむのは見たくないって言いだして。別に苦しんでなかったんだけど、お医者さんが、ちよっと最期だけ苦しみますよってポロって言うって。じゃあ、病院に入れようって。うちのすぐ五、六分のところ、鳥取でまあ良いと言われてるホスピス<sup>\*</sup>があって、運よく入れたんですよ。それで毎日通って。そういう、老いについての理想はある。おばあちゃんは穏やか<sup>\*</sup>で、最後まで針仕事してて。

とにかく、使うために働く、のがポリシー。貯めない。とにかくみんな使って死ぬ。でも、もうやってられんって思って、ダンナさんに、離婚か大学行くかどっちかにするって言ったら、じゃあ大学にしてって言われて。東京の大学で政治学を勉強した。政治学なのは、社会人入試で入れるのがそこだけやったから。大学行ったことはよかったですね、別のことが持てるじゃないですか。鳥取にいても、ここは色々あるうちのひとつでしかないって。東京に来て、お友達もできました。最近「ちよっと出てくる」でオッケーになってる。どうせなら別居しようよーって思うけど。家族のなかで、だいぶ力関係も逆転してきました。会社のこと、口には出さんけど、私がやってるでって、思ってるし。

家業に付随した小売りっていうのかな、お惣菜とかのお店を私が始めたんです。別会社にして、私の老後のお金はそっちで賄うかなって。小さい頃に親が離婚したし、生活の基盤というのがいつとも私のなかにあつて。どうやったら食べていけるか。でも、バリバリ働くと周りになるのは、じゃ、頼むよって男の人ばかりなんですよ。もう、そういう波動が出てるのになって。自分の役回り。あとね、周りにメンズのフレンドはたくさん用意しとくの。面倒くさがらずに。子どもは自分の家庭を持っていくから、私は私のパートナーを探そうって。子どもは自立してこれからがあるから、私の老後は一緒にいようねって言ってくれる人がほしいの。一緒に暮らすとか、よく会って話してくれるとか、そういうパートナー結婚しようって言われたらするかもしれないけど、でもそのとき私に財産が多かったら子どもにあげたいから、せんかな。

これから相手に求めるのは、日々の生活とか。相手に求めるものはたぶん変わっていくと思う。先はわかんないけど。最初は稼いでくれる人がいいとか、やさしい、遊ばない人がいいとか。今は、自分がしてる仕事のアドバイスをくれる人。そのとき一番気を向けているものに影響される。ダンナさんと結婚した時は家庭的でいいって思ってたけど、トータルで好きってなれない。本当はトータルで、ひとりでもかなえたらいいんだけど。この人で私はいい！ って、どーしたらなるのか。ひとつ言えるのは、ひとりでも生きていくって気概だけは持つてく。

ご飯食べに行きましょーって人には、みんな、奥さんいますね。いい人には奥さんいるのは真理ね。でも奥さんがいるからかえって気楽。女性でも、中が男性だったらそれでもいいかもしれない。恋愛とかじゃなくても。男の人と会うときと、友だちと会うときと違うじゃない。年老いてくときでもボサボサーじゃいやじゃん。年とつても小ぎれいで、かわいいおばあちゃんになりたい。

今の会社をバーツと大きくして、お金をもうけて、海外移住。つてゆうか、ちよつと海外住んでみたいなって。色々言われるじゃん。世間から。そういうのを見返してやりたいっていうのはあるの。母との関係性をこうしていこうとか、細かく考えずに、しばらくせずに、深く考えずにふわーってしていいって。

自分がどう生きていくかだけ考える。家族のことは考慮するけど、私の生き方は変えないし、相手の生き方も変えないし、家族だからゆるやかに支え合つて。子どもともなるべく距離をおこうと思つて。頼りたい気持ちもあるけど、自分の行き先を考えるのには付き合わせない。何かあつたら家族とか仲間に頼ることになるけど、できるうちは、たくさんの人と関わりたい。

自分の人生とは何か、を思つて生きていく。

この先、ダンナさんとの関係で何かあつたら、子どもたちに説明しようと思つて。母との関係がうまくとれなかったから、そうじゃない関係を子供たちとは築いていきたいと思つて関わっている。

そのときの自分が引き寄せた相手だから。

こうやって、自分の考えを整理して話せる場があるのいいね。

\*1 ホスピス…終末期（医師に不治の病と診断されてから、約六ヶ月以内の死亡が予測される状態の時期）の患者の身体的、感情的な苦しみを緩和を行う施設。

# キューティー

40代、女性。お父さんが好き(ときにはつかみ合いになるけれど)。  
実は美人でキューティーハニー！  
実はママと、ちーちゃん(妹)も好き。まじめ。賢い。

## 妹に似てるさいとーさん

書き手 || しら

いつも先走っている

しよつちゅう、あさつてのことを考えている

老いのこと考える

他人とつながりたい 男女 夫婦

紹介所

勉強していた

運動不足

ロコモを気にしている

父、八二歳

現場監督

父母お見合い結婚

認知症

母、気力の衰え



男嫌い

女性とのつき合い

玉男\*<sup>たまお</sup>1

最初の五〜六人キモイ

ずっと男避けてきた十代、二十代

清掃の仕事

ヘルパー

長時間低賃金

四十人と会って子供できた友達

\*1 玉男…埼玉在住の男性のあだ名。

## 私の生きがたさ

書き手||たまちゃん

老いのことは、すごく意識しています。

あたしね、頭が先走るのね。それで、今がおるそかになるの。

しょっちゅう、あさつてのこと考えてるの。

だから、先走るから、先のこと考えるよ。

それでね、最近、結婚紹介所に登録しようかな？ と。

家族ではね、私の生きがたさを救えないのよ。他人とつながりたいのよ、私。

同性でもね、いいんだけど……やっぱり難しいのかな〜と思う。

結婚したいのには、経済的な理由もあります。

両親が死んだ後の経済状況は心配。

父の年金に頼って女三人（母、妹、私）生きてるから。

私も、職安かよって仕事探してるけど、四十過ぎて、何のキャリアもない女がさ〜。言っちゃうけどさ、私ね、今四十ウンオになりました。

やっぱり、いい男捕まえといた方がいいのかな???

介護の仕事？

あのね……私、介護はやっぱりやりたくないっていうか……

私ね、日本のじいさん、ばあさん、嫌いなよね。

先日もS市民ギャラリーで写真展があつて、久しぶりに、ひとりで時間をとって見に行つて、そこで「ああ、来て良かったなーつて」やつと落ち着いた時間を過ごしてるのに、ギャラリーの中で、ばあ三人が大声でしゃべくつてんの。

そのうち、ひとりが電話し出して、あたしがアンケートを書こうとしているその場所で、携帯電話で、えんえんしゃべる。

あたしね、ああゆうばあさん達の最後を優しく面倒看るなんて、できないな……つて……。

## 他人とつながりたい！

書き手IIにけ

わたしね

しよつちゆうあさつてのこと考えてるの

何をやっても先のこと考えてるの

ささばしつてるの

結婚紹介所に登録しようかな

知り合いがそれで結婚したの

家族ではわたしの生きがたさを

すくえないの

他人とつながりたいの

同性だと親身に他人とつながってくれるのは

限界があるかなと思うの

老後は経済状況のことも重要だから

そのためにも結婚したい

私自身も社会とつながるため  
経済力をもつためにも

お仕事がしたい

身勝手なバアさんジイさんみると、

こんなお年寄りにはなるまいと思うわ。

あきこ 一一

小柄で優しい声でゆっくり話し、小唄・三味線の出稽古に赴く。  
最近、タップダンスを始めたせいか、冷え性が治った。  
すっごく控えめだが(つけばもっと)引き出しがありそうな70代！

## enjoy シニアライフ

書き手IIにけ

私は七五歳。

四十歳ぐらいまではからだが強かった。

手術してから元気に。

五十代で有償ボランティアを始め、ますます元気に。

夫はリタイアしてずっと家にいる人だから

よけいに家を出るようになって

ますますますます元気に。

エネルギーがあまりすぎていますね。

タップも始めたたら、体温が一度も上がりました。

一日中家にいたら、なにか落ち着かないので

「地回りしてきますね」とか言って散歩に出ます。

夫は一年あまり、入退院をくりかえし

昔は買い物でも何でもしてくれていましたけど、

今は私が買い物はしています。

でも朝夕ごはんはつくってくれますよ。

何ごとにもポジティブシンキングで

人に迷惑かけない程度にしたいこととして

精神的、肉体的に楽に生きなくてはね。

小唄を教えたり、オカリナを稽古してたりしたこともありました。

どこでもひとりでどんどん行っちゃうんです。

ハッピーアワーでキュッと一杯も大好きですよ。

タップ 朗読 シルバーカレッジ 旅行の会とたくさんやることがあります。

不安なことはあまりないですね。

何かに集中していると忘れちゃう。

わがまましないと、おだやかには暮らせませんね。

# あきこさんごめん、無呼吸で寝た

書き手 || しら

色んな男と見合いしたが振った

六〇〜七〇田舎暮らし

区報

# いまを元気に生きていく

書き手 || さいとー

いま皆さん、お墓は夫と一緒に入りたくないわって  
言うじゃないですか。

私のお骨は都会のどこかに  
ザラツと入れていただいていたいいんですよ。  
私が入るお墓は何ヶ所か見て歩いて  
少しずつ固まっているんですけど……  
娘が「駅から二分よ」「お母さんの気に入ったところがあるなら見に行ってもいいよ」とか……  
いま心配なのは、徘徊老人になること。

胃ろうはしたくないですね。

延命治療はお断りします。

尊厳死協会<sup>\*</sup>にも入ってカードをいつも持ち歩いています。

食事ができなくなったら自然に逝かせてもらいたいです。

ただし痛み止めだけはふんだんに使ってほしいんです。

尊厳死協会には夫が先に入っていて

「あなたは どうするの？」って。

それからもう二十年近くなるんですけど。

法制化すれば会費の負担もなくなります。

時々講演会もあるので聞きに行きます。

夫が入退院を繰り返して……

ちようどこの暑い時期に。でも、<sup>レ</sup>疲れた<sup>ク</sup>なんて言いません、私。

夫の入院先が虎ノ門で

素敵なところがいっぱいあって、

お昼にお食事したり、(見舞いの) 帰りに娘と一杯飲んでいこうとか……

何をするにも楽しくやっていこうと思ってるんです。

毎日出歩くでしょ。お稽古ごともいくつか。

それだけだとバチがあたるので

ボランティアもしています。

出歩くと元気になります。

私、傾聴<sup>ボ</sup>ボランティア<sup>※</sup>2 していますから。

場所はどこでも。喫茶店でも。

二子玉川のボランティアビューローとつながって……

あとはおしゃべりサロンを開いたりして

そういうことをさせてください

反対に私が元気をいただいております。

四十代のときは家でゴロゴロして本ばかり読んでたんです。

子宮筋腫でお腹が大きく膨らんで

腰も痛くて……手術したら以前よりも元気になったんですよ。

それで仕事でもしたかったですけど

何もできることがないので

それで

「お散歩する人探しています」

「病院に連れて行く人募集」の貼り紙を見て

ガイドヘルパー<sup>\*3</sup>のボランティアを始めて……

五十才になったとき、

都の制度になった有償ボランティアになって……

それで働き回ってるうちに、私自身も体が丈夫になっていきましたね。

夫は病気になる前は、食事の支度はしてくれていました。

でも退院してからは、一日起きてると疲れて夕食はつくれないんです。

だから私が買い物して、つくって……

手早くになりました。私も。

私はすぐに始めちゃうんです。

ボランティア、お稽古ごと、お友達とのつきあい……

カレンダーが真っ黒になるんです。

リタイアした男性はズーッとうちにいるじゃないですか。

ふたりだけでいるとよくないですね。

暖房・冷房ひとつとっても

ふたりいると合わないんです。

テキが外に出て行かないわけだから、私が出歩いて……

一日家にいたときは

「ちょっと地回りしてきます」といってその辺を散歩します。

出たついでに、お店を見て歩くのが好きなんです。

それですます元気になって……

本当にいま身が軽いですよ。

出歩いて、今日はまだまだ元気があるな

と思うときがあるんです。

体温が去年くらいに一度上がったんです。

ズーッと低体温だったの。

いーかげんで長いこと悩めないんです。

けんかをしてもしばらくたつと口をきいてしまって

ついうっかりとね。それでしまったーと……

そのうちね、なんで怒ってたか忘れてしまって……まーいいかと。

もう認知になりかかっているのかもしれない。

精神でも楽な方に考えて、したいことをして、

人に迷惑はかけないようにして

それで自分も元気になればいいんじゃないかって……

今はタップとシルバークレジットと旅行の会の集いは毎週あって、朗読は月二回行っています。

今も町田に月二回、九七才の方に小唄を教えに行きます。電話訪問のボランティアもしています。

午前中九時から一二時まで電話室に入って、

ほとんどが一人暮らしの人のところに、

電話をかけるんです。

福島に家を建てて、でも原発事故で東京に戻ってきて……

狭いところにふたりでしたので

一年くらい精神的に不安定になりました。

いまを元気に生きていけば、その続きでこの先もやっていけるんじゃないかな。

それまで、あんまり心配せずに暮らしていければいいかなと思っています。

住むところがあって、年金があるし、

延命治療はお断りですし、

保険のきかない治療はしません。

高額な医療費は戻ってきますし。

呑気なんですネ。

今までどーにか食べてこられたので

この後はそんなにお金はなくてもいいかなーって。

私のぶんまで夫が病院に行ってますから。

一年に一回、基本健診だけ受けています。

私は長生きしたいとは全然思わないんです。

兄も姉も四十代で亡くなりました。

それが運命さだめなら仕方ないと思いますが。

自分が五十代になったときはホッとしました。

娘が丈夫なんです。病気しないし、前向きな考えをしてくれるし。

世話かけたくないなーとは思いますが。

若い時は私こんなに大胆じゃなかったんです。



元気なお年寄りは一ひとり遊びができないとねえ。  
誰かと一緒じゃないと何もできないじゃダメですよ。  
ひとり遊びって大切。

- \*1 尊厳死協会・健やかに生きる権利や安らかに死ぬ権利を自分自身で守るために尊厳死を考える会。  
治る見込みのない患者が、医療についての希望を書面に記しておく「リビング・ウィル（LW）」  
の普及や尊厳死の法制化などを目指している。
- \*2 傾聴ボランティア・高齢者や大震災の被災者など、心に悩みや寂しさを抱える人の話を真摯に、共  
感をもって聞くことで、心に傷を負った人との心のふれあいをするケア活動。
- \*3 ガイドヘルパー・移動介護従業者。障害をもつ人の外出を介助することで、自立し、社会参加を  
促進する仕事。

## 戒名もいらない

書き手 〓 たまちゃん

長生きしたいとは全然思わない。

兄も姉も四十代で亡くなっているんですよ。

だから、五十歳になった時、あ、四十代を乗り切れたって、思いました。

いつかは、どんなふうになるでしょうけど、それまでは、元気に、楽しく、あんまり心配しないで、生  
きていければよいかな。

住むところがあって、年金があればね。病気になるったら、とかいいますけれど、保険が効かない治療は  
していただかなくていいのでね。

いつまでも、いつまでも、生きていてもね。

尊厳死協会の会員になって、延命治療お断りのカードを持って歩いています。

私の健康法は毎日、出歩くこと。お稽古ごとも幾つかして、それだけだと罰が当たりそうなので、ボラ  
ンティアもさせていたんでいます。

一日中、家にいたら、ちょっと地回りしてきますって言って出かけて。お店回るのが好きなので、一度

出たら、夕方まで帰ってこない。「もう、ご飯できたかしら？」って思いながら。

夫は料理が上手で「かみさんができないから、私がやっています」って。

あんまり外出が好きなので、徘徊老人になるんじゃないかと夫に恐れられています。

それは、まあどうなりますか、なってみてのお楽しみ。

住むところを探す時「あんまり遠くに行かないで」って、娘が言うので、「できることならあまり面倒かけないで逝きたいわ」と口から出掛かりますけれど、言わないですよ。お世話になることもあるのかもって思っています。

夫は、死後は福島医大に献体するように登録してあるんですね。「白菊の会」っていうんですけど。時々、はがきが届きますよ。お食事の会とかの。でも、こっち（世田谷）で、おしまいになったら、どうするかしら？　と、思っていて、電話で確認したら、「どこまでも、お迎えに行きます」って。普通は献体したら、一〜二年でお骨になって戻ってくるんですけど、うちのは閉所恐怖症ですから、個人のお墓はイヤで、大病院内の集合墓に、他のお骨と一緒にざらっと入れてもらえばいいんだと。それで、私にも「あなたはどうするの？　早く決めておきなさいよ」って。娘も気持ち良さそうなお寺（お寺）を見ては、「ここどう？　駅から二分よ。お母さんが気に入ったところがあったら、決めておけばいいんじゃない」って。どうしようかしら？　私は都会の賑やかな場所に決めたいと思っています。海はなんだか冷たそうだし、樹木葬も山の中で寂しいし……。お骨を収める場所があればいいんです。墓石はいらさない。戒名もいらさないです。

## かつやまちゃん

懐が深い50代の男性。  
知的好奇心の旺盛な行動派。  
モットーは、家族で何でも話し合うこと。

## 彼女がやりたいことは何でも

書き手||あきこ

ガンを告知されたときには、彼女の前で大泣き。涙が止まりませんでした。癌が転移して歩くのに不自由を感じた時にどうしていいか判らず、ケアマネ<sup>\*1</sup>も通さず、トイレの手すりやお風呂の椅子など、みんな自分でやってしまいました。

朝五時に起きて、掃除洗濯などして、運動不足になるので二十分くらい歩いてからバスに乗り、睡眠不足を補いながら会社に行きます。

彼女がやりたいことは何でもさせてあげたい。彼女があつて、ボクがあるという感じです。

会社はいくら尽くしても、家族のためにはならない。今は家族のために精いっぱい尽くしたい。

\*1 ケアマネージャー…介護を必要とする人と、福祉・医療・保健のサービスとを結ぶ仕事をする人。

## 家族

書き手||ポラン

仕事の代わりはいても、家族の代わりはいない。

「彼女があつてほくがあるのかなつて……」

## 彼女があつて、僕があるのかなと思う

書き手 〓 ふうちゃん

僕が精神腫瘍外来<sup>\*1</sup>に行くようになったのは、別の体調が悪くなって、たまたま彼女の主治医だったところにかかっちゃったんですよ。先生は彼女がガンであることもご存知だったので、「精神腫瘍外来に行ってみますか」って言われて。意味もわからずに「はい」って。何をするとところかも分からずに行ったんですね。夫婦でガンになったときはどうするのかという話をするのか、とか、私もガンの検査をするのかな、とか、そういうことを思ってたんですよ。初めて行ったときは世間話をして、あれ、何をしに行ったんだらうって。最近どうですかという話から、最近の彼女の話をして、先生そこで、話をすり替えて。一回三十分くらい、月一回くらい行ってきましたね。

先生は色々と重たい話を聞いていると思うんですけど、絶対笑顔を絶やさないんですよ。暗い話をしているときも笑顔なんです。行って良かったですね。本当になんでもない話をするんですけど、不思議と気持ちがるなるんですよ。最近、どこどこ行ってきたんですよ、と言うと、じゃあその話を聞かせてくださいって。

家族って、すごく、患者、病人に対して気を遣っていると思うんですよ。彼女のガンが分かったとき、病院で、ぼく、彼女の前で大泣きしちゃったんですよ。個室にいたので、病院も遅くまでいいよと言ってくださいって。

「地域の物語2013<sup>\*2</sup>」のワークショップに参加を決めてから、ガンってわかった。本当だったら迷惑になるからやめようよってなるんですけど、本人がやりきってから治療したいと言ったので。本来だったら治療に入らないといけなかったけど、本人がやりたいことはなるべくやらしてあげようと思いましたが。さらなとは別のグループの発表で、すごく嫌だったシーンがあったんですよ。未来のシーンで、「ガンなんて平気さ」って言っているのがあって、すごく腹立たしかった。

「末期ガン」って、お医者さんが言うのは当然なんですけど。ケアマネの方から「奥さまの症状は末期ガンです」って、「末期」って、強い口調で言ったんですよ。ちよつと待ってくれよ、こっちはそういうつもりで頑張ってるんじゃないんだよって。一度、電話切っちゃって。でも、心を落ち着けて、かくなおして、感情的になっちゃってしまいました。と。むこうは謝るしかないから、謝り倒していました。けれど、理学療法士を紹介してほしくて相談してるのに、奥さまは介護保険じゃなくて医療になりますからって、なぜかという奥さまは末期ガンですからって。そういうことされると、信頼できないですよ。

最初は、ケアマネを通さないで区役所に申請したんですよ。要介護認定をもらうのに区役所に行ってくださいって聞いたら、この書類を出してくださいって言われて、出したら、そのまま

受理されちゃったんですよ、

もつとすごいのが、そういうのを頼む以前にトイレに行けなくなっただんで、トイレに手すりを付けようと思っただけ探したら、売ってないんですね、アレ。それで、ホームセンターの人がレンタルがありますよって教えてくれて、役所じゃなくてホームセンターで聞いたんです。それで、借りて、付けました。ケアマネって制度を知らないから、全部自分でやっちゃうんですよね。

やっぱり、時間的にすぐ欲しいじゃないですか。お風呂イスもすぐに欲しかったから、買っちゃいました。後から考えたら、要介護認定が取れてからだと安かったんですけど、すぐ欲しかったから。あれ、一度しか買えないんですね。消耗品でも。

仕事の方は、色々と責任のある業務に就いていたんですけど、そっちを外してもらって、時間的に自由の利く仕事に変えてもらって。本来、うちの会社は一〇時〜一八時なんですけど、九時〜一七時で前倒してもらって。早めに帰って、ご飯つくって家事すると、つべん回っちゃいますよね。今、昼間はヘルパーを頼んでないんです。彼女は、自分のことは自分でできるので。

皆さんどうやってらっしゃるのかなって思うことがあって。オートロックのマンションの鍵の受け渡し。僕は消防署に聞いたんですよ、救急患者が本人で、電話はできても動けない場合、どうするんですかって。オートロックに関しては、いらっしゃる家を探し当てて開けてもらいます。鍵だとドアを切っちゃいますって。

朝は、さらなはあまり起きないです。僕が五時起きで、七時頃には家を出ちゃうので。職場は遠くないんだけど、自分が今あまりにも歩かなくなってるんで、家からバス停のちよつと遠いところまで歩いていってるんです。二十分くらい。始発のバス停まで歩いて行って、乗って、寝れるときは寝ちゃいます。寝つきは早いですね。早いんですけど、さらなが咳し出すと気になって起きちゃいますね。肺に転移してるのが残ってるんで。

僕のルーツをたどっていくと世田谷区中町なんですよ。西から移ってきた人たちが居を構えて、そのうちの一人がうちの五代前のおじいさんみたいで。位牌に名前があったから分かるんですけど。

近所に自分と同じ苗字が多いっていうのは気になっていたので、菩提寺に聞いたら、菩提寺はそこで亡くなった人の名前しか分らないんですね。そしたら、あそこのお米屋さんが一番古いから聞いてみたらって言われて。そこのおじいさんが自分の祖先はどこから来たのかをまとめた本を自費出版されていて。そこに私の祖先と同じ名前があって、これうちのおじいさんだって。

僕は、毎日、自分の領土を歩いているのかなって。それを言い出したのはうちのカミさんで、自分の領土を歩いているんだよって。

僕は話聞かないんで。さらなは聞き役ではないんですけど、彼女の意志に反したことを勝手にやるので。彼女は怒りますよ。怒るんですけど。彼女の方が大人なんですよ。僕がすごい幼稚なんで。彼

女があつて僕があるのかなと思う。

今の状況のことは、基本的には人には知らせていません。お見舞いとかも、本人は弱い身体を見られるのが一番嫌みたいなので。手伝いには、兄と慕っている人が手助けしてくれるんです。あと、ときどき彼女の妹が来てくれたりします。兄弟仲は良くなりましたね。彼女がガンになつてからは特に。ただ——今、僕はさらながらやりたいことは何でもやらせようと思つてます。それに関しては、自分の時間は一切無視してます。

医者に対しても、一切隠さなくていいというのが本人の希望で。先生もそれを分かっているし。患者と医者も信頼関係がないとダメですよ。

今回、分かつたんですけど、入院する前には、病院つて治療の方針の具体的な話をあまりしないんですね。いついつ病院に来てください、それで入院していただいて、説明するのでつて、どんな治療をするかもよく分からないのに、入院なんてできないですよ。それで、先生チェンジ！ まで言つたんですよ。その上の教授まで呼び出して、なんで説明してくれないんですか。でも、それが病院のルールだからつて。最終的には、入院する前に説明してくれたんですけど。

僕は、その場で全部メモつて、後で清書して、ノートにまとめてるんです。メモの原本は原本で残しておいて。使う薬から、治療の期間から、基本的には、先生の話したことをまとめています。本人の状態は、先生に説明する必要があるときにまとめてメモしているんですけど。

薬の数がほんといっぱいあつて、飲んだ飲まないつて出てくるじゃないですか。やつぱり痛みを抑えるのには、定期的に飲むのが一番なんです。一覧表をつくつて、それを見ながらまとめて、そうしてかないと、飲み忘れたりしちゃうんで。在庫管理して、足りないものを下さいと先生に言つてます。

一日分の薬を朝、昼、晩、寝る前とひとつひとつ袋に入れていきます。僕が入れています。入れると便利なのが、外出するときにそのまま持つていけるので。よく百均で小分けにするやつ売つてるじゃないですか。そういうのだと取り忘れちゃうんですね。疲れてくると、取り間違えたりしちゃうんで、一日分で分けたほうがいいと、これは看護師さんに教わりました。

僕の生活は、家内がガンになつて変わりました。それまでは仕事がとにかく忙しくて、家にいなかったんで。責任のある仕事で、やりがいにはあつたんですけど、忙しすぎましたね。それだつたら家族のことに時間使つたほうがいいよね、というのが、僕の今の本当の気持ちです。

総務部長までやつたんですけど、それをやりながらつて、無理だから、時間に融通が利く部署に変えてもらつたんです。会社では病気のことを上司に話していたので、上司も心配してくれていて。

会社の規定とか、熟読してかなり詳しく知つてはいるんですけど、この規定は家族が病気になつて人にはあまり役に立たないよねつて。この業界つて有給とる人あまりいないんですけど、親会社は、捨てちゃつた過去五年分の有給を復活させて、有給がとれるつて制度を持つていて、親会社が持つてはいるんだから、うちもそうしたいと言つています。有給じゃない休暇もとれるんですけど、それだと給与が三分の二くらいになつて、それで医療費払つてつて、無理でしょ。

職種を変えてもらったんです。葛藤はあります。

重責のある仕事をやってたんで、そんな中で休みはとれないじゃないですか。自分が会社に行くら貢献していても、休みがとれなくて家族を不幸にするっていうのができなかったんですね。もういいよって思ったし。

僕はそういうふうにしたことって一回じゃないんですよ。自分のやってる仕事が変わりから見てもういうふうに思われるんだろうって。不安になったことがありました。

過去に思っていた気持ち、今の決断につながっているのはあると思います。

\*1 精神腫瘍科…がんを告知された患者本人やその家族の心理的な苦しみに対してケアを行うための部門。がん告知が一般的になる七〇年代から設置され始めた。

\*2 二〇一三年に行われた「地域の物語」のワークショップ、Cコースにおける「ふたり」のこと。振付家・ダンサーの楠原竜也が進行役となり、「ふたり」の関係に焦点をあてて、身近な人取材し、身体を動かしながらダンスパフォーマンス作品をつくった。

## ふくちゃん

蒸し野菜が主食。  
いつも、誰かとハウスシェアしている。  
実は天パ。

## おじーちゃんのこと

書き手||さいとー

たまたま五月の連休に実家に帰る予定を立ててたんだけど

父親から「おじーちゃん具合悪いけど命に関わりはない」ってLINE<sup>\*1</sup>がきて。

それが五月二十九日の夜で、その晩に帰ることはできなくて予定通り翌朝帰ることにして。

おじーちゃんの病院の場所聞いて、新幹線で実家へ行く途中で病院に寄って、そこで家族と合流したんだけど……

私がちよつと怒ったのは三十一日の朝。

後から考えると、あーあれは怒りだったんだなーと。

病室に入ったらおじーちゃん最初寝てて、寝てるから寝てるおじーちゃんの写真とか撮って、読みかけの本とかあったからそれを読んで待ってたら……

もう起きた瞬間からおじーちゃん手術はしないって×(バツ)の形を腕でつくってみせて。

おじーちゃん、あんまり耳聞こえんから病状のこととか聞いてないはずやし。

私も何も聞いてなかったし、命に関わりないとしたか。

それやのにいきなり「手術はしない」でよくわからなかった。

結局、ガンだったんですけど。

もしかしたら看護婦さんとかがポロっと

手術のことおじーちゃんに言っちゃったのかも……

いい病院なんですけど……すごい親切な……

それでガンのこととかもまだ言っていないのに先走って「切るのイヤー」って……

おじーちゃん冷房ガンガンかけて寒いくらいが好きなのに

病院ではそれもできてへんかったし。

テレビ大好きなのに、見れてへんからよけい機嫌悪いんかなと思って、

テレビカードをお母さんが買って大好きな野球見れるよーにして……冷房もガンガンにして。

私の親はおじーちゃんがガンやって、お医者さんに聞いてて。

ガンが腸を圧迫して腸閉塞になって入院したん。

それでこの現状を解決するための策を、三つか四つ医者から提示されて……

ガンを切って人工肛門につなげるとか……

腸のいたんでるとこ切って元気なところ同士くっつけるとか……

あとなんやったかな、忘れちゃった、ノート調べればわかるけど……

おじーちゃんもう九十いくつ前半やから、一般的には手術はやらないんだけど、お医者さんが「おじ

いさん見たら元気やし、切ってもいいかなー」って。



おじーちゃん耳聞こえないけど補聴器嫌がって使わない。集音器使ってる。うちのおばーちゃんは補聴器使ってる。つい最近、八九歳ぐらいから。

おばーちゃん内弁慶な人でパートとかもしたことない人やけど、戦争の時延身隊で働いてた。うちのことはすっかりやって、家事好きで料理するの好きで……

でもあたし食べるの遅いからゆっくり食べたいのに、食べるそばから片付けていく。

おじーちゃん耳聞こえないから絵を描いてそこにガンの塊を描いて「これがガンです」って書いた。そこにいくつかこーいう方法があるよって説明を書いた紙を病室に三枚も四枚も貼って、ガン患者の病室にガンガンって書いてるの、面白いなって思ったけど。

こちら（家族）としてはおじーちゃんになにかしらの対応をしてほしかった。

ガンを取るのも全然難しくない手術で切って弱る人もいるけど、お医者さん最初は手術すすめてはらへんかったけど段々おすすめ！ って感じで言ってきたし……

おばーちゃんにも、おじーちゃんがガンっていうこと言っておじーちゃんに手紙を書いてもらった。

「そんな状態で帰ってこられても困ります。手術してよくなって早く帰ってきてください」

うちのおばーちゃんひざが悪くて歩くの大変やから病院にも行けてへんかったけど

「早くよくなって車でスーパーに連れて行ってください」とか書いてた。

その手紙をおじーちゃんにもっていったら、おばーちゃんからの手紙だって嬉しそーに受け取って、でも書いてあることが手術しろやから顔の表情が変わった。

おばーちゃんの手紙も私たちの説得も功をなさず……

悲しくなってなんでーなってちよつと泣きそーになったし……

この時わきおこった感情はなんなんかなーと思ってる……

いくら先生が信用できるからってやっぱりおなか切るのは誰でもこわいし。

手術しても一〇〇%よくなることはない。

緩和ケア科の先生も同席して話したんやけど、

どっちかっていうとご本人の気持ち尊重するって感じで……

私はおじーちゃんに今より元気で長く生きてほしいんだけど、

今のままでとごはん食べられへんし、

一緒に温泉行けるように復活してくれたらえーなって思ってる。

それは私のがままつつたらわがままやし

おじーちゃんの「切るの嫌だ」って気持ちもわかるけど……

なぜ切らないんだー

手術したらもつと過ごしやすくなるし……

あんなに「地域の物語」のワークショップで介助される側の主体性とか学んできたのに……

おじーちゃんは自分のペースを人に邪魔されたくない  
もくもくとなにか物作ったりとかが好きで家の配線勝手にいじる。  
自分の思うようにしたい人。

結局点滴も往診も断って病院も強制的に「俺は出る」。

行動力だけはあるから勝手にタクシー呼んでまわりがそれに振りまわされる。

今は、腸が詰まって弱ってるからものは食べれないはずなんだけど

自分でおかゆつくってちよつとずつ食べてる。

腸閉塞になる前は車の運転そろそろやめてほしいというまわりの気持ちを聞かず

トロトロ走ってたけど。

その後はうちの弟呼びだしたり、おじちゃんの車きた時一緒に乗せてもらってる。

物欲はある。

お墓勝手に買ってきたし、新しいもの好き。俺の好きなものは俺が買うみたいな……

カップ麺好きでひとりで食べて……

おばーちゃんそういうの嫌い。

おばーちゃんに珈琲いれてもらって味にケチつけたりする。「うすい！」

おじーちゃん男っぽいところあるんだ。

おばーちゃんを大事にしてるよーで、でも実は相手の意志とか嫌がつてる感じを無視してるから、

おばーちゃんはめんどうさがる。

おじーちゃんはそういうところある。

七月に帰ったら、おじーちゃんの中で私とケンカしたことになってるらしく、

会った瞬間に「こないだはちさと（ふくちゃんのこと）とケンカしたけど悪かった」って

ちよつと興奮して、私に一万円わたして、「交通費、おこづかいだ」って……

あと「お前も早く……結婚すんの待ってんねんから」って……

南方に行ってたって聞いた気もしてたけど、それはおばーちゃんの兄。

（おばーちゃんの兄は）ひとりかふたりいて（戦地で）病気で死んだんやけど、おじーちゃんは北の方へ送られて、

整備の仕事してたらしく、もう少しでシベリアに抑留されるところだったのを、

たまたまほかのところへ行ってた時に隊のほかの人は抑留されて

おじーちゃんと隊長さんだけまぬがれた……それもまた聞き。

おじーちゃんあんまりペラペラしゃべる人じゃないから。

おじーちゃんのこと実はあんまり知らないって気づいた。

高校生の中ごろ、おじーちゃんの右手の人差し指の第二関節から先がないって突然気づいた……

小さい時からおじーちゃんのうちに行って一緒にごはん食べて

あんなに一緒にいたのにそれまで気づかなかった。

あれどーしたんって聞けなかった。

毎日会ってたのに見てるよーで見てなかった。

\*1 LINE:二〇二一年のサービスの公開とともに、瞬く間に普及したソーシャル・ネットワーク

グ・サービス。

「地域の物語」は、世田谷パブリックシアターが開館した一九九七年から現在まで、毎年約三ヶ月間にわたって行われる演劇ワークショップだ。公募で集った人々が、その年ごとに設定されたテーマをグループごとに対話をしながら考えを深め、そこで見つけたアイデアや「誰かに伝えたい」と確信したことを演劇の形式へと紡ぎ、地域の人々に伝えることを目的にしている。

二〇一四年、二〇一五年のテーマは「介助・介護」。家族介護をされている方や、介助・介護を仕事としている方たちを中心に、二十代から七十代という多世代にわたる参加者たちが、その成果を「介助するひと、介助すること」（二〇一四年）、「あつちはこつち、こつちはあつち」介助・介護をかんがえる」（二〇一五年）というタイトルの発表会作品に取りまとめてシアター ترامで発表した。

二年間にわたり同じテーマでワークショップを進めるなかで、常に立ち戻った思いや問いは、介助・介護する側（こつち）とされる側（あつち）の関係である。つまりそれは、片方が与え、もう一方が与えられるという関係ではないのか、そもそもあつち（障害者？ 高齢者？）とこつち（健常者？）の境界線とは何なのか、というものであった。

\*

ワークショップのプロセスでは、参加者からの多くのアイデアや個人のエピソードなどがグループで共有されるが、それらすべてのことが作品の中に盛り込めるわけではない。観客に共有されることなく、参加者相互の記憶のみに留められるはずだった数多くのエピソードや発見を、舞台とは違うかたちとしていかに残しうるか、いま・ここにはいない人々にも伝えられるか——「地域の物語」から展開したこの企画「地域の物語アーカイブプロジェクト」は、そんなことを思考するなかで始められた。そして「アーカイブプロジェクト」には、「地域の物語」（二〇一四年、二〇一五年）の参加者のうち、ほかの参加者の話をもう少し聞きたい、このテーマについてさらに話してみたいなど思う人々が加わってくれた。

アーカイブのかたちとして、今回は「聞き書き」の形式をとっている。ここでの「聞き書き」とは、「聞き手／書き手」が、「語り手」の印象に残った言葉や内容を、その語り口などを思い出しながら丁寧に記憶に基づいて再構成し、ことばとして書き留めていくことを指している。テープ起こしのような正確さではなく、一つのエピソードが聞き手／書き手によって違う響き方で描き出されるやり方である。こうした揺らぎそのものが、均一性の中で語ることでできない社会のありようをそのまま示しているとも思う。「聞き書き」によって立ち現れたそれぞれのエピソードの、時に重なり、時にずれるレイヤーの層からは、話し手の思いや人生だけではなく、それを受け止めた聞き手／書き手の思いや人生も垣間みることができている。

このような「聞き書き」における「語り手」と「聞き手／書き手」の相互作用を可能にしているのは、参加者たちが同じ空間で身体を使いながら意見を交換していく演劇ワークショップでの時間を共に経

てきたからでもある。演劇ワークショップでは、そのプロセスを通じて互いの違いや存在を見つめ、他者を想像し受け入れることを徐々に可能にしていく。そうした関係性が生まれることによってはじめ、「話し手」は自分が話す個人的な記憶や体験、思いがもろとも相手に受け入れられていると感じ、そして「聞き手／書き手」も自分の受け止め方を相手に伝えたいと思えるような場が作り上げられる。

\*

「アーカイブプロジェクト」の初回は、まず全員で集った。少し身体を動かしたのち、参加者自身が「地域の物語」の最中にもっと話したいと思ったテーマ（「老い」「怒り」）や、もっと話を聞きたかった相手の話を決め、グループ毎に「聞き書き」を行っていった。それは参加者の主体的で自発的な場だった。途中、かつやまちゃんの話が聞きたいという案が出た。かつやまちゃんは「地域の物語」の参加者ではなく、参加していたサラナのパートナーだ。サラナは二〇一三年に大病をし、回復した二〇一四年からワークショップには介助された側として参加していた。ワークショップ中、サラナは自分の側について介助してくれたかつやまちゃんの気持ちをいつも気にかけて、そのことを発表会までに考えたいと常々言っていたが、二〇一五年のワークショップの最中に再発して途中から出られなくなった。この冊子には、サラナ自身が聞きたかったかつやまちゃんの話の聞き書きも収められている。

世田谷パブリックシアターは、これまで「演劇とは何か」などということについて、人生において全く興味を持ってこなかったような人々が、演劇というメディアを知らないうちに実践し、それぞれの人生が交差し、身体が交流する場をつくりあげる手助けをしていきたいと思っている。そしてそのような場を、同じ歴史のいま・ここに住む人々とだけでなく、十年後、二十年後、百年後の未来に住む人々ともつくるのが可能なのか検証してみたい。「地域の物語 アーカイブプロジェクト」はそんなことも目論んでいる。

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター劇場部学芸）

地域の物語 アーカイブプロジェクト 2014-2015

# あっちはこっち こっちはあっち

介助・介護をめぐる聞き書き集

実施日	2015年 7月11日(土) 全員でオリエンテーション 7月28日(火)～9月13日(日)グループごとに聞き書き 9月26日(土) 全員で声に出して読み合う
実施場所	世田谷パブリックシアター稽古場 ほか
参加者	あきこ、うっちー、さいとー、しら、 チャコ、にけ、ポラン、ようこ、よしだ
ゲスト	かつやまちゃん
進行役	花崎攝、山田珠実
進行役アシスタント	山本雅幸
世田谷パブリックシアター学芸 学芸インターン	恵志美奈子、福西千砂都 今村舞
発行日	2016年3月20日
発行	公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター 〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 Tel.03-5432-1526 <a href="http://setagaya-pt.jp/">http://setagaya-pt.jp/</a>
企画	世田谷パブリックシアター
編集	大谷薫子(モ・クシュラ株式会社)
デザイン	松永路
製本・印刷	株式会社リヒトプランニング
協賛	<b>TORAY</b> 東レ株式会社
後援	世田谷区



世田谷パブリックシアター  
SETAGAYA PUBLIC THEATRE